

研究紀要

第 10 号

1993

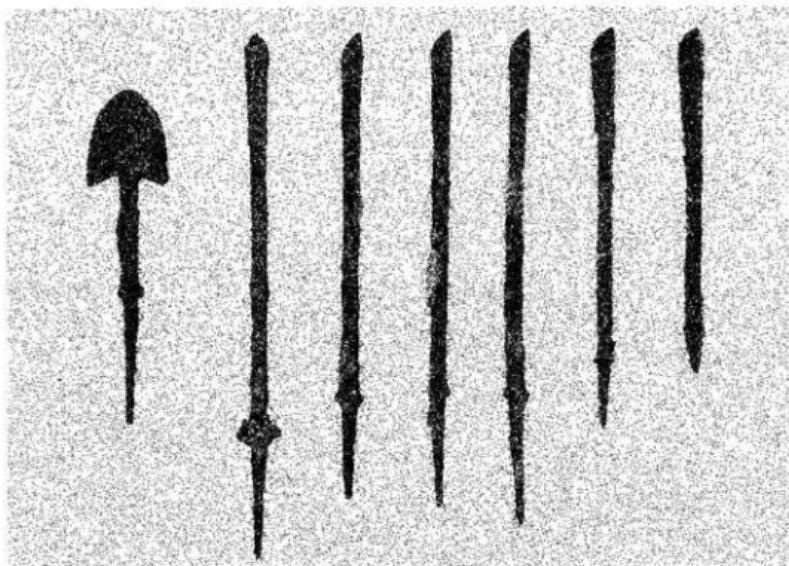
財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要

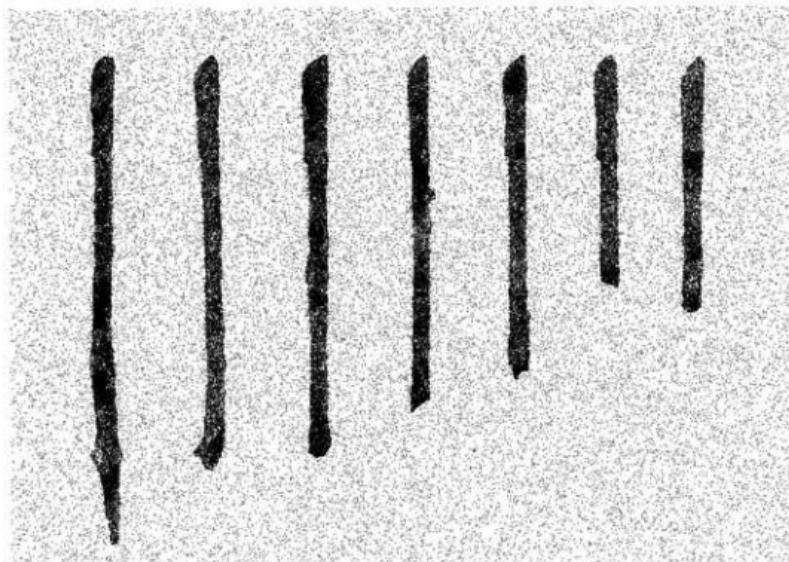
第 10 号

1993

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

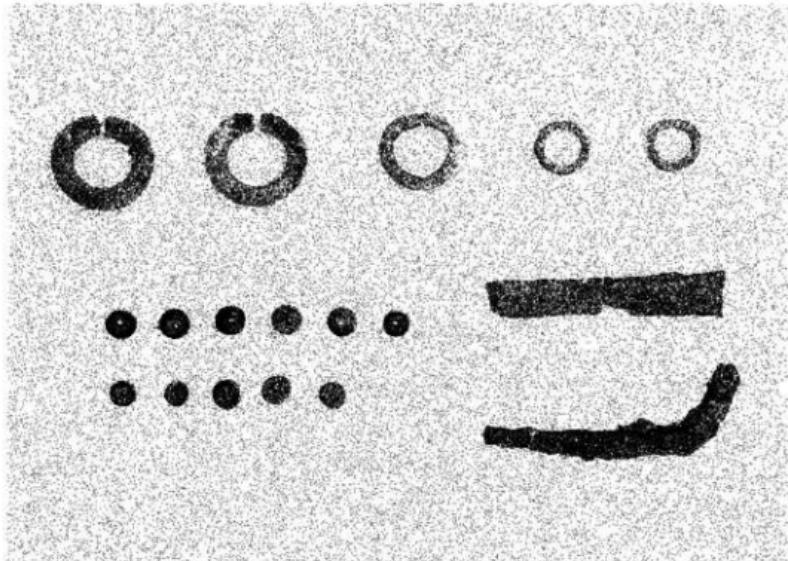


1 毛呂山町川角15号墳 鉄鏃 (1)

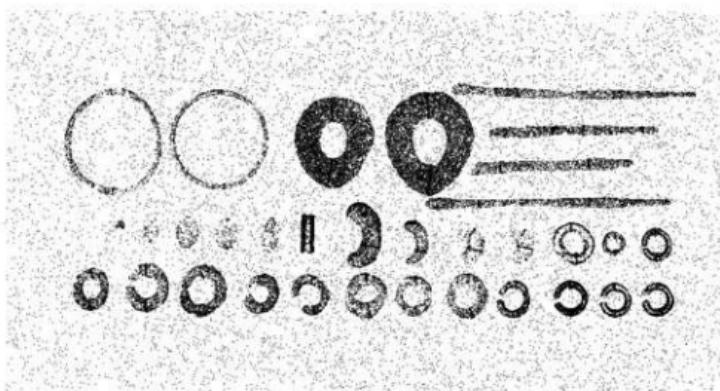


2 毛呂山町川角15号墳 鉄鏃 (2)

図版2



3 毛呂山町川角15号墳 装身具・鉄製品



4 毛呂山町大類古墳群出土遺物

目 次

序

〈論文〉

- 子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討 金子 直行……(1)
—細隆起線文土器の出自と系譜を中心として—
- 羽状縄文系土器の紋様構成（点描） 2 黒坂 権二……(45)
- 遮光器系土偶についての考察 浜野美代子……(83)
- 方形周溝墓出土の木製品 野中 仁 福田 聖……(113)
- 吉ヶ谷式集落の展開 石坂 俊郎……(159)
- 埼玉県域の出現期古墳における土器祭式の様相 山本 靖……(181)
- 東国における終末期古墳の基礎的研究（2）
田中広明 大谷 徹……(203)
- 腰帶の一考察 田中広明……(245)
- 北武藏の古代通路について 井上尚明……(257)

子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討

—細隆起線文土器の出自と系譜を中心として—

金子直行

要約 繩文時代早期の子母口式は、貝殻沈線文系土器群から貝殻条痕文系土器群への移行期の土器群として型式設定されていた。その実態は不明瞭なままであったが、子母口貝塚の資料が公開されたことによって、型式設定時の様相が明かになってきた。「木の根A式」は子母口式の新段階として設定された型式であるが、細隆起線文を主文様要素とし、野島式との型式区分が判然としない土器群であった。土器の構造的な分析を通して、細隆起線文土器の出自は田戸上層式以降の隆帶文の変遷過程に求められ、「木の根A式」の文様構造は田戸上層式の施文帶構造の変遷過程に系譜が求められたが、既に新生の文様構造として確立していることが検証された。その結果、「木の根A式」は子母口式と分離され、条痕文系土器群の初頭期に位置付けられ、大枠での野島式に編入されることが検討された。本論は、「木の根A式」期における型式学的なホライズンを設定して広域編年を確立することを目的とすると共に、沈線文系土器群から条痕文系土器群への変遷を構造的に解釈しようとしたものである。

1. はじめに

繩文時代早期の土器群には、大きな変革期が三度訪れる。改めて述べるまでもなく、大枠での撫糸文系土器群、沈線文系土器群、条痕文系土器群である。各土器群の編年序列は不動にして確乎たるものであるが、土器群の交代期において未解決の問題点を残している。撫糸文系土器群の後半期から沈線文系土器群の終末期にかけては押型文系土器群が併存するが、その系統および編年的位置付けは百家争鳴を呈し、未だに定まるところを知らない。

各系統の土器群は文様および文様帶構造等全く相違する土器群かの如く映るが、それぞれの成立期においては前系統土器群の要素を少なからず継承し、新しい土器群を生成している。また、併存関係にある土器群は絶えず相互補完的影響関係にあることを常態とし、一方的な影響関係は有り得ない。時空を通じて網の目の如く張り巡らされた情報、換言すれば土器群の保有する型式学的要素全てに対する「縦横連鎖」を構造的に内包することを常としている。従って、全ての要素を網羅的に弁別する型式概念は無数に存在するが、それを最大公約数的に総括するのが型式名称である。どの認識部分で総括するかは、どの情報を引き出し如何に土器を読むかによって相違するもので、自ずとレベル差が生じるのである。

小林達雄氏の様式概念は最も包括力の大きい型式概念であり、社会背景をも含めた型式としての上位概念であるが、その結果、様式の隣接地、交代期においては土器群の把握に対して規定力が弱まる。ここで検討する「木の根A式」土器は限定された土器型式ではあるものの、子母口式土器の一部として条痕文系土器様式の初頭に位置付けられている(谷口1989)。しかし、子母口式はまさに

貝殻沈線文系土器様式と条痕文系土器様式とを繋ぐ狭間の土器群として認識され、安易に条痕文系土器群に組みされない内容を保有しており、未解決の問題点を多く残している。子母口式土器の型式内容が確立されていない今日では、沈線文系土器群から条痕文系土器群への変遷觀は混沌としているのが現状であろう。今回「木の根A式」土器を再検討することによって、沈線文系土器群から条痕文系土器群への変換を、如何に認識するかについて考えてみたいと思う。条痕文系土器群（土器様式）の総体的な把握については、別に触れる機会を持ちたい。

幸にも昨年、「田戸遺跡」（金子他1992）「子母口貝塚・大口坂貝塚」（金子1992）の山内資料が公開されたことにより、それぞれ型式設定時の資料が明かになった。該期の資料が増加した現在、これ等土器群の今日的意義を検討するとともに、改めて沈線文系土器群から条痕文系土器群への変遷を整理すべき段階に至ったと言えよう。筆者は、かつて「子母口式土器論争」が華やかな折り、野島式土器について不十分ながらも概観したことがある（金子1982）。その時点では、細隆起線文土器の絡みで子母口式を筆者なりに検討してみたが、型式觀を確乎たるものにするまでには至らなかつた。その後、明花向遺跡（金子1984）、貝塚山遺跡（金子1985）、猿貝北遺跡（金子1986）等において該期の土器群を検討する機会に恵まれ、「木の根A式」土器の一部を野島式土器として把握してきた経緯がある。しかし、未だに「木の根A式」と野島式を明確に区分しきれていない。そうした中にあって、筆者の型式認定に対しては賛意を得られていても、舌足らずの型式觀には批判を頂いてきた（飯塚1987）。

子母口式土器総体については別稿において検討することにして、本稿においてはその一助となるべく、細隆起線文土器の出自と系譜について、田戸上層式以降の土器群を素材にして検討すると同時に、筆者に対する批判にも応えて行きたいと思う。尚、筆者の土器認識は上述した如くであり、その型式学的検討においては、一度既存型式の枠組という呪縛から土器を解放しつつ、縦横連鎖構造を紹解き、可能な限りの情報を引き出すことを第一義的とし、諸要素に見られる複合構造原理を解説する中で、既存型式概念との相關性を検討することを宗としている。その結果、一個の土器は呼び慣わす呼称を必要とするものの、一概に既成型式概念で律しきれない側面を多く持ち、多系統要素の産物であることが改めて認識されるのである。従って、土器群を解釈する場合において、指摘された様な突然変異的な思考は持ち合わせていない。「土器は土器から」である。

2. 「子母口式土器論争」

子母口式土器は山内清男氏によって型式設定され、その具体的な内容の一部が「日本先史土器図譜」第12集に示されたが（山内1941）、基本資料となる子母口貝塚出土土器の公開が遅れたため、解説において後世に混乱を残した代表的な土器型式である。型式設定時の状況や、子母口貝塚の地点貝塚の状況、出土土器については私見を加えたことがあり（金子1992）、子母口式土器の研究史的解題は高橋雄三（高橋1981）、小川和博（小川1981）、毒島正明（毒島1983）の各氏によって詳細に検討されているため、詳しくはそちらに譲りたい。

子母口式土器は型式の存否問題を含めて1970年代後半から論議が盛んとなり、1980年代に入って先の「子母口式土器論争」へと進展していった。ここで取り上げる「木の根A式」土器は、その満

中に安孫子昭二氏によって仮称として提唱された土器型式であり(安孫子1982)、子母口式の新しい段階の土器群として設定された経緯を持つ。

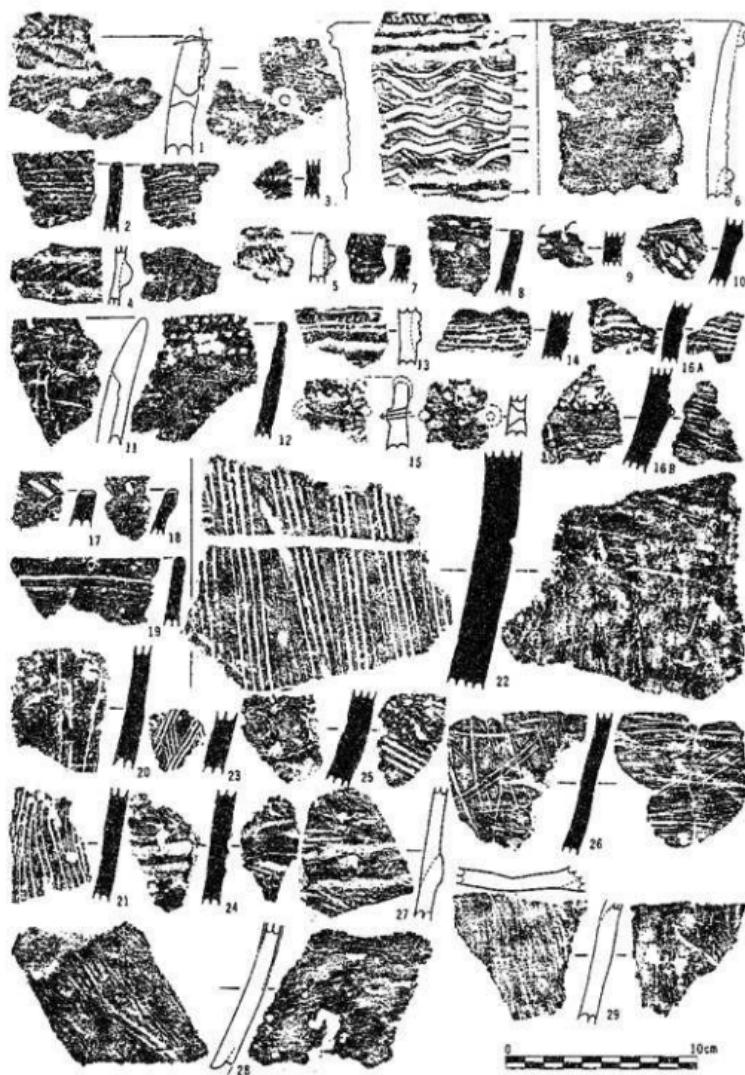
「子母口式土器論争」とは、安孫子昭二氏と瀬川裕市郎氏との論争であり、沼津市元野遺跡の報告書における瀬川氏の安孫子氏に対する批判(瀬川1975)に端を発する。瀬川氏はその報文にて、多摩ニュータウンNo269遺跡における安孫子氏の子母口式細分案(安孫子1967)に対して、子母口式土器の扱いに混乱を招いた元凶であると批判し、多摩ニュータウンNo269遺跡出土土器も子母口式ではないと断定した。その後、「沼津市清水柳遺跡の上器と石器」(瀬川1976)において、列点状撫糸押捺紋(江藤・長田1939)と呼ばれる縦条体圧痕文土器を野島式の併行型式に認定し、従来の子母口式に対比させる見解を否定した。

一方、鈴木克彦氏は堂場遺跡における野島式土器の考察を経て(鈴木1972)、後日「子母口式土器の検討の必要性」(鈴木1978)を発表し、子母口式の存在を疑問視した。熊谷常正氏も鈴木氏の見解を受け、子母口式を客体的な存在として捉えた(熊谷1974)。また、男女倉遺跡(筑沢1975)では縦条体圧痕文土器が子母口式のみに限らず、茅山上層式にも存在する可能性が示された。この様な子母口式存否に係わる研究動向と軌を一にしながら、瀬川氏は「子母口式土器再考」(瀬川1982)を著して、文様要素が類似することから子母口式を茅山上層式段階に比定し、田戸上層式から野島式への変遷觀を披瀝した。更に、概説である「条痕文土器」(瀬川1982)では、野島式土器を10段階に細分し、全ての階梯に縦条体圧痕文土器が併存する説を発表している。

奇しくも同年、安孫子氏の「子母口式土器の再検討」(安孫子1982)が刊行され、瀬川氏への反論が始まる。安孫子氏は清水柳遺跡第二群土器を検討すると共に、茅山上層式以降の縦条体圧痕文土器と子母口式を総体的に検討、分離し、子母口式土器の再考を促した。そして、自ら多摩ニュータウンNo269遺跡での子母口式4細分案を撤回し、子母口式の新しい段階の土器群として仮称「木の根A式」を設定しながら問題の所在を明かにした。その上で、清水柳遺跡の特徴的な縦条体圧痕文土器は清水柳E式として設定され、改めて子母口式に対比された。

翌年、瀬川氏は「野島式土器に関する2~3の覚え書」(瀬川1983)で、安孫子氏への反論を行う。氏は野島式の成立課程における田戸上層式からの推移を強調し、清水柳E式の野島式併行説を補強した。また、同年、毒島正明氏は研究史を詳細に検討する中で、子母口式に認定されて来た土器が茅山上層式以降の土器群を含んでいたこと、子母口貝塚では茅山上層式以降の土器群も出土していることを理由に、結論を明示していないもののその論旨から推測すると、子母口式を特に茅山上層式以降に位置付ける見解を示した(毒島1983)。

茅山上層式前後に係わる縦条体圧痕文土器は、神奈川考古同人会主催の「縄文時代早期末期初頭の諸問題」のシンポジウムにおいて、子母口式と分離され茅山上層式以降に位置付けられ市民権を得るに至った。また、筆者はシンポジウムの成果を踏まえ縦条体圧痕文土器を東北南部地方の常世2式(芳賀1977)と関連付け、茅山下層式の新しい段階には既に存在し条痕文系土器群の終末段階にまで存続するものと解釈した(金子1991)。更に、子母口貝塚出土の山内資料を整理する過程においての知見をえて、子母口式土器存否論、茅山上層式比定論は清算されるべき旨を指摘した。と同時に、田戸上層式から子母口式、野島式へと系統変遷するなかで細縫起線文土器の存在を



第1図 多摩ニュータウンNo.269遺跡出土土器

重視し、その変遷過程を把握することが子母口式土器解釈への第一歩であり、筆者の研究指針でもあることを述べてきた（金子1992）。

瀬川・安孫子両氏の「子母口式土器論争」の後、良好な資料の増加とともに新旧の縞条体圧痕文土器は正しく認識され、子母口式土器に関する考察も増えてきた（田村1985、高橋1986、等）。子母口式土器研究は新たな局面を迎えたつあり、加えて山内資料の子母口貝塚出土土器の公表に伴い、子母口式の型式内容の吟味が急務となってきたと言えよう。

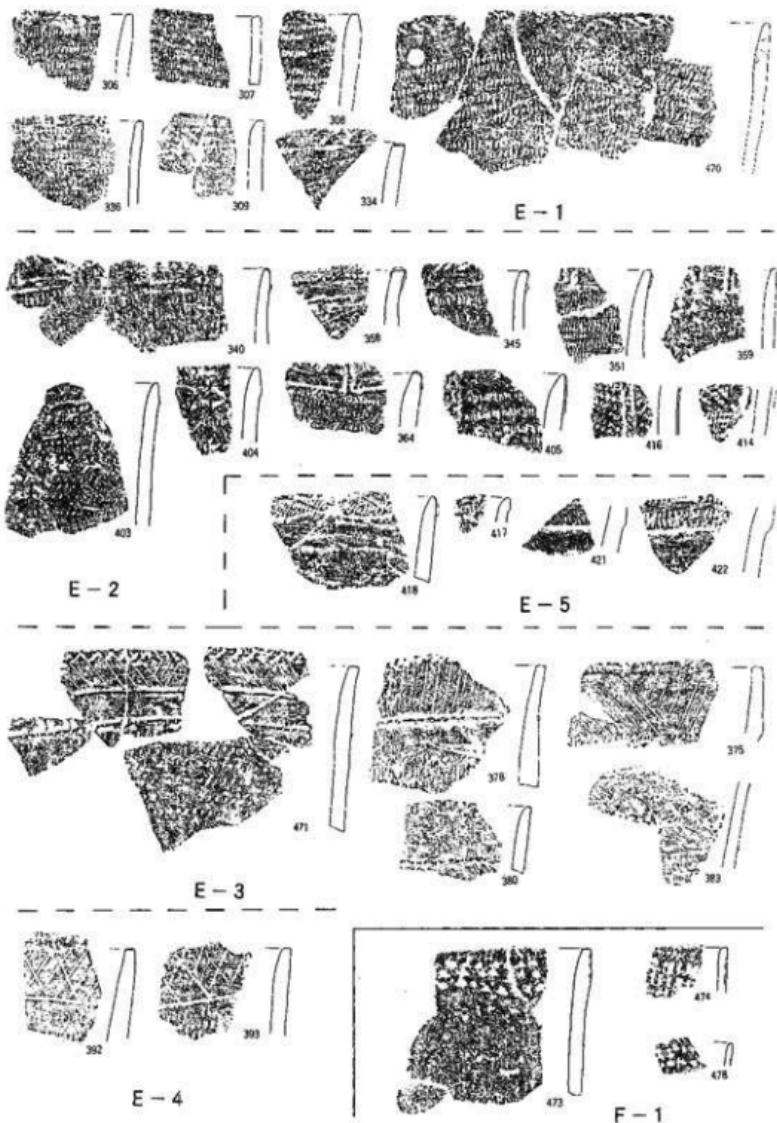
3. 多摩ニュータウンNo269遺跡と清水柳遺跡の検討

【多摩ニュータウンNo269遺跡出土土器】

ここで、論争的となった土器群を簡単に振り返ってみたい。第1図は安孫子氏によって子母口式に認定された、多摩ニュータウンNo269遺跡出土土器である。瀬川氏との論争の発端になった土器群であるが、有文土器の中で今日的に見て明かに子母口式ではないものは6、13、16であり、安孫子氏の弁明する通りである（安孫子1982）。10は2～3単位の刺突文を施す胴部破片であり、断面形態では胴部に若干の屈曲部を持つ器形を呈するものと推測される。11は先細りする口唇部を呈し、口縁部に連続して貝殻腹縁文状を呈する爪形文を弧状に施文する。10については型式的帰属は不明であるが、16の存在から鶴ヶ島台式との関連が想起される。11は茅山上層式以降の土器群にも存在するため、胎土整形等から判断されるものであろう。15の円孔文土器も11同様茅山上層式以降の土器群中に存在するため、実見していない段階での即断は避けたい。

しかし、他の縞条体圧痕文土器や、口縁部に刺突文を施すもの、角頭状の口唇部に刺突文を施すもの、刻みを施すものは子母口貝塚の子母口式に比定される。有文土器の中には細隆起線文土器が存在しないことが指摘されているが、24は横位の凹線状間が隆起し隆起線文化している破片が存在する。細片のため全体構成は不明であるが、胴部に巡る3条の隆起線文と想定することも可能であろう。また、無文土器においても器面の擦痕状整形、単位の判断される条痕文施文等、子母口式として認定される要素を充分に兼ね備えている。考察においても有文無文、擦痕文条痕文の割合比、施文具の検討等、その後の子母口式土器研究に資するところが多く、今日的にもレベルの高い報告書であったことが改めて認識されるのである。

不幸であったのは下吉井式土器が若干存在したことと、細隆起線文土器が存在しなかったことである。ここで問題としたいのは子母口貝塚出土土器と遙かの無い程類似しているものの、所謂細隆起線文土器が存在しない点である。子母口貝塚においても細隆起線文土器は少数であり、子母口式の段階では細隆起線文は主体的な文様要素ではない様である。その結果、No269遺跡では文様要素の欠落、差引等で、考察にみられる細分案、つまり、貝殻腹縁文を所有し、縞条体圧痕文を所有しない一群（城ノ台北貝塚）→縞条体圧痕文と貝殻腹縁文とを併有する一群（子母口貝塚、大口坂貝塚、夏島貝塚、No52遺跡）→貝殻腹縁文を所有せず、縞条体圧痕文を所有する一群（No269遺跡）→縞条体圧痕文を所有するとともに、細隆起線文をも所有する一群であるという4細分案が提唱されたのである。資料の少ない当時にあって編年に苦慮された様子が窺われるが、やはり文様要素による細分編年案には常に落し穴が存在している様である。この時点で、子母口貝塚と城ノ台北貝塚の子母



第2図 清水柳遺跡出土土器(1)

口式の相近に気付いているものの、城ノ台北貝塚資料に対して懷疑的でないこと、野島式との区分を明確にしていないこと等が惜しまれる。「子母口式土器の再検討」では、文様要素を問わず最後の段階が実質上「木の根A式」として型式設定されたものと思われる。

【清水柳遺跡出土土器】

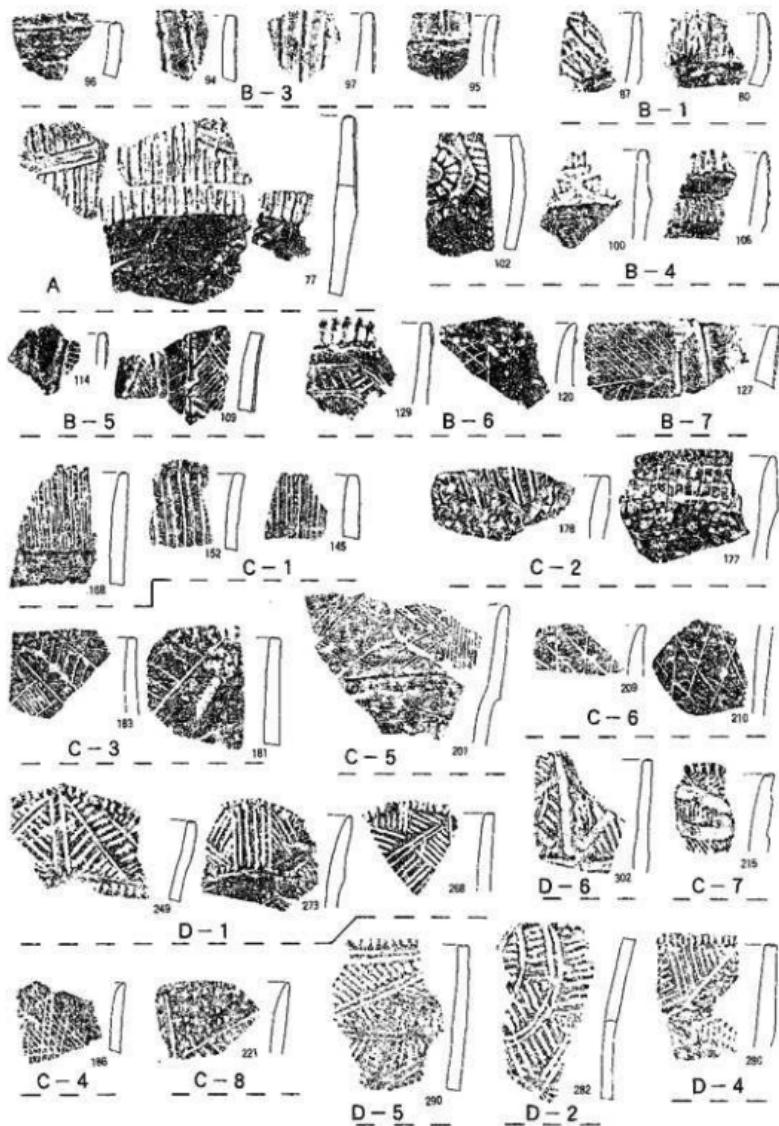
第2、3図は清水柳遺跡出土土器である。清水柳遺跡は1966年東名高速道路の建設に伴って調査された遺跡で、その報告書は10年後の1976年に刊行されている(瀬川他1976)。その間に、遺物は出土地点等が不明となってしまったため、型式学的分類による土器群の共伴関係を把握できなくなってしまった点が惜しまれる。安孫子氏の指摘の様に土器分類者と考察者が異なるため、スムーズに文章を解説できないが、安孫子氏の論文(安孫子1982)の中で対応関係と、安孫子氏自身の変遷観が細かく述べられている。詳細は報告書と論文に譲りたいが、安孫子氏の見解を中心にして筆者の見解も加えたい。

清水柳遺跡出土の第二群土器は文様要素別にA～Kに分類され、Aが細隆起線文、Bが隆起線文、Cが細沈線文、Dが太沈線文、Eが絡条体圧痕文、Fが刺突文、Gが貝殻腹縫文、Hが貝殻条縫文、Iが擦痕文、Jが無文、Kが纏文を特徴とし、それぞれ更に細分されている。絡条体圧痕文を持つ土器群と、野島式全般に亘る良好な土器群が検出されているのが特徴であり、分類も多岐に亘るが、子母口式と野島式の関係からA・B類とE類に的を絞って検討したい。

E類であるが、瀬川氏はこの種の絡条体圧痕文自体に幅を持たせて考えており、野島式全般に亘って共伴することを持論とする。考察では野島式以前での存在も認めている節もあるが、その後の論考においては、一貫して野島式段階に比定している。E-1は横位の絡条体圧痕文のみのもの、E-2は口縁に1条の隆起線が巡り絡条体圧痕文とて文様を構成するもの、E-3は絡条体圧痕文、隆起線文、細沈線文によって文様を構成するもの、E-4は絡条体圧痕文と沈線文で文様を構成するもの、E-5は隆帶の上に絡条体圧痕文を施文するものである。瀬川氏の変遷観は不明瞭であるが、安孫子氏の解説(安孫子1982)の手助けを借りて、「纏文文化の研究」における「条痕文土器」の変遷図(瀬川1982)を参考にすると、E-3・E-4の様な文様要素を多く持ち、文様帶幅の広いものからE-2へ、やがてE-1へと退化する方向性が窺われる。

これに対し安孫子氏は子母口式からの変化の方向性で、絡条体圧痕文土器を野島式土器に先行する土器群と捉え、E-1→E-2→E-3・E-4の変遷観を示し、次ぎの段階にA・B類+C…1の細隆起線文土器、沈線文土器から野島式と位置付け、さらにD-1を編年付けている。

筆者は安孫子氏と同様な変化の方向性を考えるが、氏程の幅を持たないものと考えている。先ず、絡条体圧痕文土器は、E-5が関東的な絡条体圧痕文で子母口式に比定されることから、列点状撲糸押捺文(絡条体圧痕文)土器も大半がこれに伴うものと思われる。子母口貝塚では口縁部や尖底部付近にまで横位の線状絡条体圧痕文を施文するものが出土しており、絡条体圧痕文の施文幅等も比較の対象となり得よう。絡条体圧痕文土器の中で、E-1だけの段階が存在するかは疑問となるところである。確かに関東地方で出土する清水柳E式類似の絡条体圧痕文土器は、隆起線文を伴わない場合が有り、薦尾遺跡(鈴木1975)では段部で区画した幅広の口縁部文様帶に施文し、篠田寺南遺跡(青木1986)では器形の変化は無く口縁部に幅広の文様帶状に施文するものがある。しかし、



第3図 清水柳遺跡出土土器(2)

田中谷戸遺跡（安孫子1976）では段部で胴部を区画し、口唇下に隆起線文を巡らして、文様帶内に横位の絡条体圧痕文を施文するものがある。この様な例から、絡条体圧痕文は地文状に施文するのではなく、明確な区画を伴う場合は少ないと文様帯幅と何等かの関連性が窺われる。従って、E-1のみで存在するものではなく、絡条体圧痕文土器の組成の一部を構成するものと思われる。

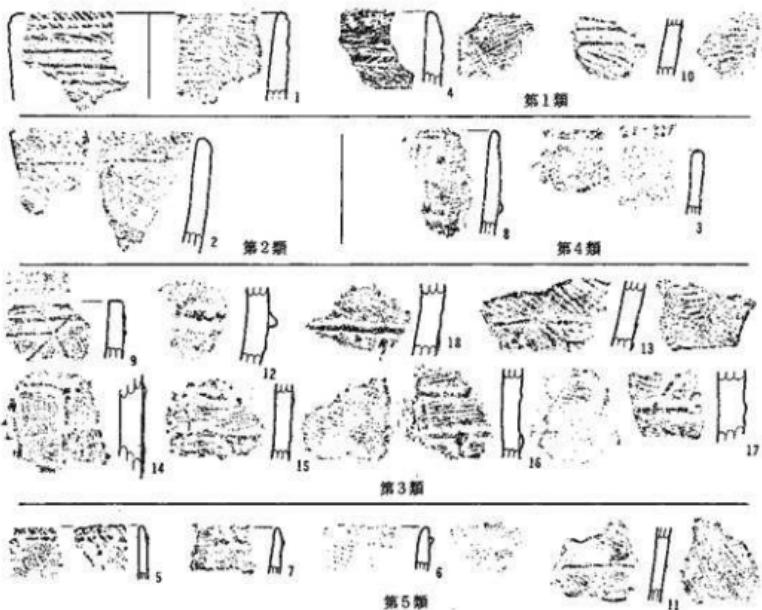
第2図470は口唇部直下に無文帯を設けてそれ以下に絡条体圧痕文を施文する点で、口唇部直下に施文する他の土器とは異なる。この無文帯幅はE-2の隆起線で区画された口縁部の間隔でありE-2との関連性が窺われる。また、この口縁部の幅は、E-5の隆起線幅に近いものであり、3者の口縁部幅は相同的の関係に当ろう。従って、E-5を介在して帰納的に解釈すれば、E-1とE-2を必ずしも分離する必要がないことが理解される。また、E-2には縦位に垂下する隆起線文が存在し、幅狭の口縁部区画内や胴部まで垂下する。縦位区画は新たな要素ではあるが看過されない要素である。隆起線文はさらに細隆起線文へと変化し、口縁部の区画幅も広がり各種の文様要素を取り組み、E-3・E-4が成立すと考えられる。従って、絡条体圧痕文土器はE-1・E-2・E-5→E-3・E-4へ変遷するものと捉えたい。

A・B類は隆起線文及び細隆起線文土器であるが、基本的にはB-1・B-3の一部からA・B-4へ変遷するものと考えられる。B-1・B-3は第3図96の様に口縁部に横位併行の細隆起線文を配するものも合わせて分類されているが、基本的には口縁部の幅狭の文様帶内に縦位の細隆起線文をやや間隔を開けて垂下するものと解される。この文様構成は、絡条体圧痕文土器のE-2の隆起線文の構成からの変化ではなく、出自の異なる文様構成と理解され、詳細は後に述べるがE-2段階で既に他地域では出現している可能性が高い。又、沈線文のC類は比較資料が乏しく保留とせざるを得ないが、器形、文様帯幅、文様構成の類似から、B-1類に近い位置関係が考えられる。また、C-1の第3図168の沈線文は施文具、施文手法、施文幅でE-3の第2図378に酷似しており、両者の同時存在を証左するものとなろう。細隆起線文の区画及び絡条体圧痕文が消失して成立した土器とは考え難い。従って、清水柳遺跡の土器群はその古い段階においてE-1・E-2・E-5・B-1（一部）・F-1→E-3・E-4・B-1・B-3・C-1・C-2→A・B-1（一部）・B-3（一部）・C-1（一部）・C-2（一部）・B-4へと変遷し、絡条体圧痕文土器と他の土器群がオーバーラップしつつティピカルな野島式土器へと変化していることが理解されるのである。これ等の土器群は、安孫子氏が提唱した「木の根A式」と抵触するものであり、野島式との境界を明らかにする土器群でもある。

ここで問題となるは細隆起線文の出自であり、筆者は以前にも指摘したが（金子1984）、その出自を田戸上層式からの変化の過程に求めている。細隆起線文は子母口式の一要素にされていることから、田戸遺跡と子母口貝塚の土器群についての比較検討が必要となる。

4. 木の根遺跡の「木の根A式」土器の検討

「木の根A式」は、新東京国際空港用地内のNo.6遺跡である木の根遺跡（宮1981）A地点出土土器を基準に、安孫子氏によって型式設定された。その内容は「子母口式の新しい段階で、野島式への橋渡しには高輪寺・常陸伏見・木の根A遺跡等の一群がくる。絡条体圧痕文・貝殻腹縁文・沈線・刻



第4図 木の根遺跡出土土器

目等と細隆起線の貼付の複合する文様が特徴的であり、地域により、遺跡により、その要素の組成（様相フェイズ）に多少の違いがみられ、型式名を設定しにくいが、仮に木の根A式とでも呼ぶことにする。これは清水柳E式の新しい段階に対比されるし、いずれ他の地域でも纏まった資料が得られてくると思われる。なお、東北半の早畠田3類、南半の楓木1式は、この段階および次の野島式を包括するものであり、将来は細分されるようになろう。」（安孫子1982）と記されている。ここでは明らかに、各文様要素と複合するものの細隆起線文土器を中心とし、東北地方では野島式との型式分離が難しいことが指摘されている。このことは関東においても、野島式との区分が難しいことを述べているものとも思われる。実際、野島貝塚の貝層中からは縦条体圧痕文土器は検出されず、「木の根A式」が子母口式の要素を持ち、野島式以前とされる理由は明解である。しかし、縦条体圧痕文は野島式に併施文される事例が増えており、要素自体で两者を区分することは難しく、そのためには構造的な相違を明らかにしなければならない。

第4図は木の根遺跡出土土器である。1～18は第III群土器に分類された「木の根A式」の有文土器であり、該期の無文土器も相当量出土している。第III群土器は若干の繊維を含み、条痕文及び擦痕文を施文することを特徴とする。1～18は少數ながらも保有する情報量が多く、幾つかにグループ化が可能である。

第1類（1、4、10）

口縁部に2～3本の細隆起線文を横位水平に施文するものである。比較的厚手の土器で、口唇下から細隆起線文を施文するもので、胴部に施文するものは2本対の細隆起線文で胴部を区画するものと思われる。口唇部は外端部を押し潰す様に沈線状の刻みや、絡条体圧痕文を施文する。横位の細隆起線文上には、細かな刻みを施すものがある。

第2類（2）

1点のみの出土であるが、口縁部に1条の細隆起線文を巡らすものである。比較的厚手の土器で、口唇外端部から細隆起線文区画内の口縁部に、細い絡条体圧痕文を斜位に施文している。土器の造りは第1類に類似するが、文様構成が異なる。

第3類（9、12～18）

全て同一個体の保証はないが、文様構成を復元すると、口唇直下に細隆起線文を1条巡らし、以下水平に配される細隆起線文間に縱位、斜位の細隆起線文を組み合わせて粗い区画文を構成するものである。角頭状を呈する口唇部には、絡条体圧痕文を刻み状に施文している。

第4類（3、8）

口縁部にやや幅広の文様帶を区画するもので、区画要素に貝殻腹縁文や細隆起線文を使用するものである。文様帶内は無文であったり、縱位の沈線文や貝殻腹縁文を施文するものがある。

第5類（5～7、11）

比較的薄手の土器群を一括する。5～6は口唇に細隆起線文を巡らすもので、口唇部から細隆起線文が垂下するものもあり、胴部に水平施文するものもある。

無文土器では、口唇部外端に面取り状の整形を施し擦痕文整形のもの、角頭状を呈するもの、刻みを施すもの、先細りの丸頭状を呈するもの等変化に富む。

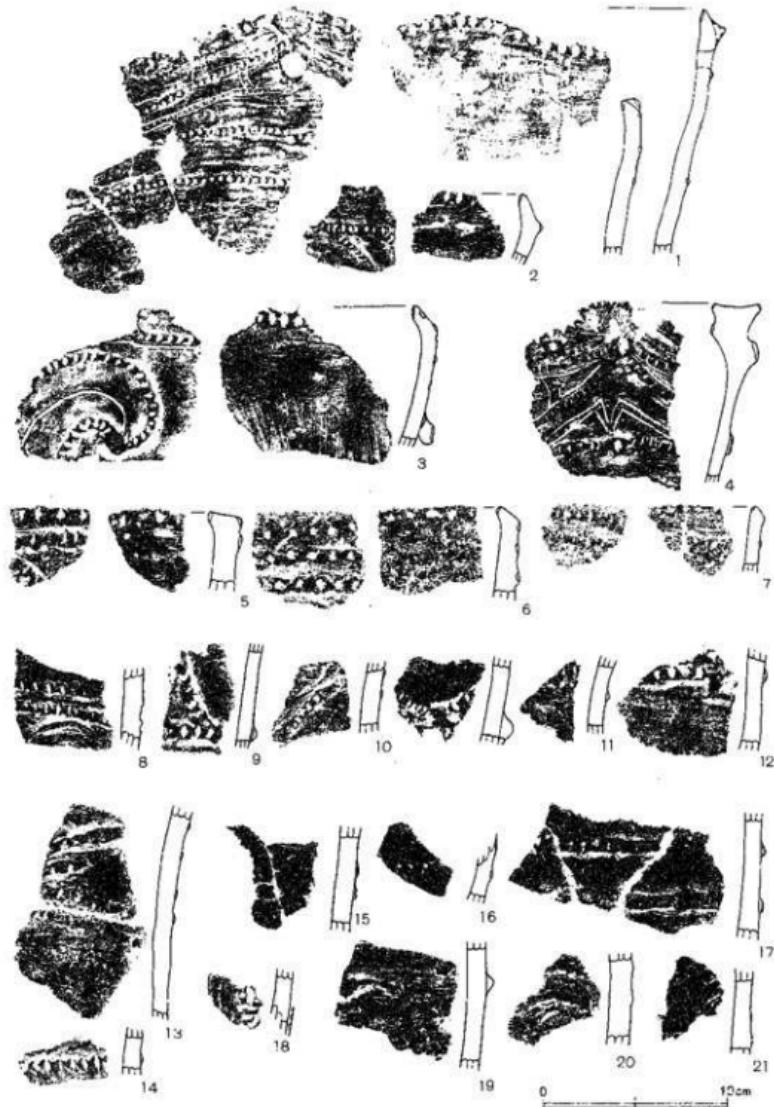
木の根遺跡の「木の根A式」土器は総括すると若干の繊維を含み、条痕文を施文し、細隆起線文を主たる文様要素とする土器群で、文様要素には絡条体圧痕文、貝殻腹縁文、沈線文を複合し、文様構成には水平線を基調として、水平のみのもの、縱位区画線をもつもの、縱位・斜位線を組み合せた粗い幾何学文のもの等を合わせ持つことを特徴とすることが理解される。従って、それぞれの文様構成がどの様に形成、繼承されてきたかを検討しなければならない。

5. 田戸遺跡・子母口貝塚出土土器の検討

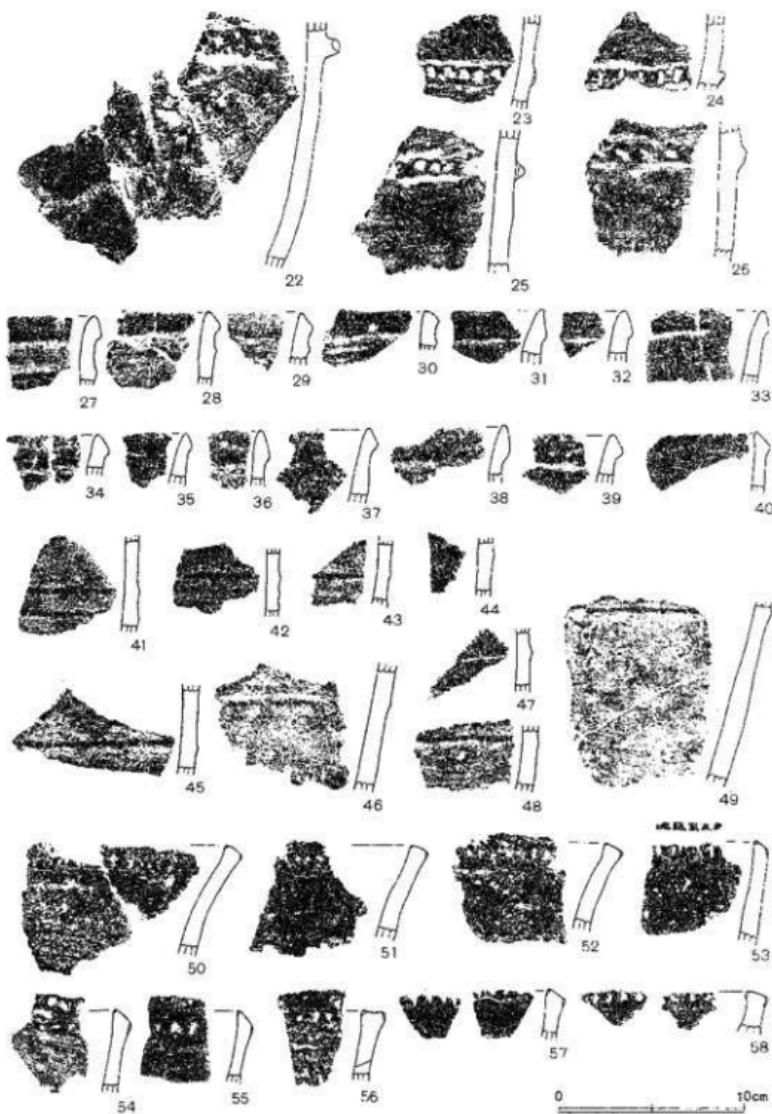
【田戸遺跡出土土器】

今日現存している田戸遺跡の資料は赤星直忠氏発掘資料（赤星1935、横須賀市立博物館1988）と、山内清男氏の発掘資料（金子他1992）である。田戸遺跡は沈線文系土器群を主体とするが、撚糸文系土器群、押型文系土器群も少量出土している。沈線文系土器群は、三戸式を若干含むが、田戸下層式と田戸上層式を主体とし、並的には田戸上層式土器が多い。

第5、6図は山内資料の田戸上層式土器で、隆帯文系の代表的な土器群を集めたものである。隆帯文の出自は明確ではないが、屈曲部の隆帯化や、沈線文間の隆起化も隆帯文発生の一要因となる。何れにしても田戸上層式の中でも新出の要素であり、新段階に位置付けられることが多い（田村1985等）。隆帯文は確立すると沈施文と併施文され渦巻文を基調としたモチーフを描く（1～4）



第5図 田戸遺跡出土の山内資料(1)



第6図 田戸遺跡出土の山内資料(2)

が、文様帶、文様描出等全て隆帯文のみで行う土器が成立する(5~26)。口縁部に1~2本の隆帯文を巡らせて文様帶の上限を区画し(5~7)、隆帯文による曲線モチーフを構成するものと思われる(8~11)が、胴部の区画にも2本対の隆帯文を使用するものがある(8、13、17)。また、胴部の区画に、太い隆帯文1本のみを使用するものもある(22~26)。隆帯文の多くは押圧状もしくは刺突文状の刻みを施すが、隆起線文化したものには刻みの無いものもある(19~21)。隆帯文系土器では胎土に微量の纖維を含み、器面も若干荒れているものが多い。口唇部は幅広く内外端が突出するものの(5)や、内折気味に屈曲するもの(6)等があり、必ずといってよい程内外端部に刻目を施している。

これ等の隆帯文土器の他に、隆起線文を施文する一群が存在する(27~49)。この一群は隆起線文以外の文様要素とは複合せず、横位にのみ配される構成を取り、無文化傾向の強い土器群である。器面の荒れが著しく、器面調整等細かい点は不明であるが、微量に纖維を含み、擦痕状の整形が施されていたものと思われる。器形は直線的に外傾する深鉢形を呈し、口唇部が尖る外削状を呈する(27~40)。その結果、口唇部断面が三角形状を呈し、外端部が稜線状を呈することによって、口縁の上端部を区画する効果を持つ様になる。また、口唇下にやや間隔を開けて、1本の隆起線文を配し、口縁部を区画するものもある(27~30)。それ以下は不明な点が多く、胴部は同様の隆起線文で区画するが(44~49)、2本対の隆起線文を使用するものもある(41~43)。

この隆起線文土器の編年的位置付けが問題となったが、他に刺突文を施す第7類第2・3種の土器群が存在するため、これ等と組成を成す土器群として解釈し、田戸上層式の最も新しい段階に位置付けた。子母口式と文様要素や文様構成が類似する点で、田戸上層式に比定することを躊躇せざるを得なかつたが、土器群の基本的な造りが共通するため、田戸上層式として捉えて置いた。なお、この土器群の復元個体は、横須賀市立博物館の「考古資料図録III」に収録されている(横須賀市立博物館1988)。田戸遺跡における隆帯文土器の変遷を追れば、隆起線文化と共に無文化が進み、モチーフではなく文様帶横帯区画線が細隆起線文化して継承されていることが理解されるのである。そして、胴部区画線は隆帯文の段階で既に2~3本を組として施文されるものが現れており、細隆起線文化と共に間隔を狭めて子母口式のモチーフ(第7図19)へと変遷するものと思われる。田戸遺跡では、木の根遺跡第1類、第2類へと系統変遷する粗野的なモチーフ構成は成立しているものの、第3類や第5類に見られる縱位区画要素は見られない。

【子母口貝塚出土土器】

第7図は子母口貝塚出土の山内資料であり、第8図は渡辺誠氏の調査した「A貝塚」出土土器である(渡辺1969)。子母口貝塚は4箇所の地点貝塚で構成されており、今日では北側の貝塚から時計回りに番号で表記されている(増子1989)。山内資料はアルファベットの表記では「D貝塚」に相当するが、今日的な表記では「第2貝塚」となる。また、「A貝塚」は「第3貝塚」となる。

山内資料の中には明らかに田戸上層式の隆帯文土器も存在するが、その他の隆起線文系土器を第7図に載めた。絵条体圧痕文を施文するものは、口縁部の段帯状肥厚部に施文するもの(1)、隆帯で区画した幅狭な口縁部内に施文するもの(2)、胴部を区画した隆帯上に施文するもの(3)等がある。また、絵条体圧痕文ではなく刻み(10)や刺突文を施すもの(9)もある。隆帯に加飾のな

いものは、口唇直下に隆帯を巡らすもの（4）、口縁部に巡らすもの（6）、胸部に巡らすもの（5、7、8）等があり、何れも比較的太い隆帯文1本を単位として施文している。一方、細かな刻目を施した3本対の隆帯文を、鋸歯状のモチーフを描く様に施文するもの（11）もある。

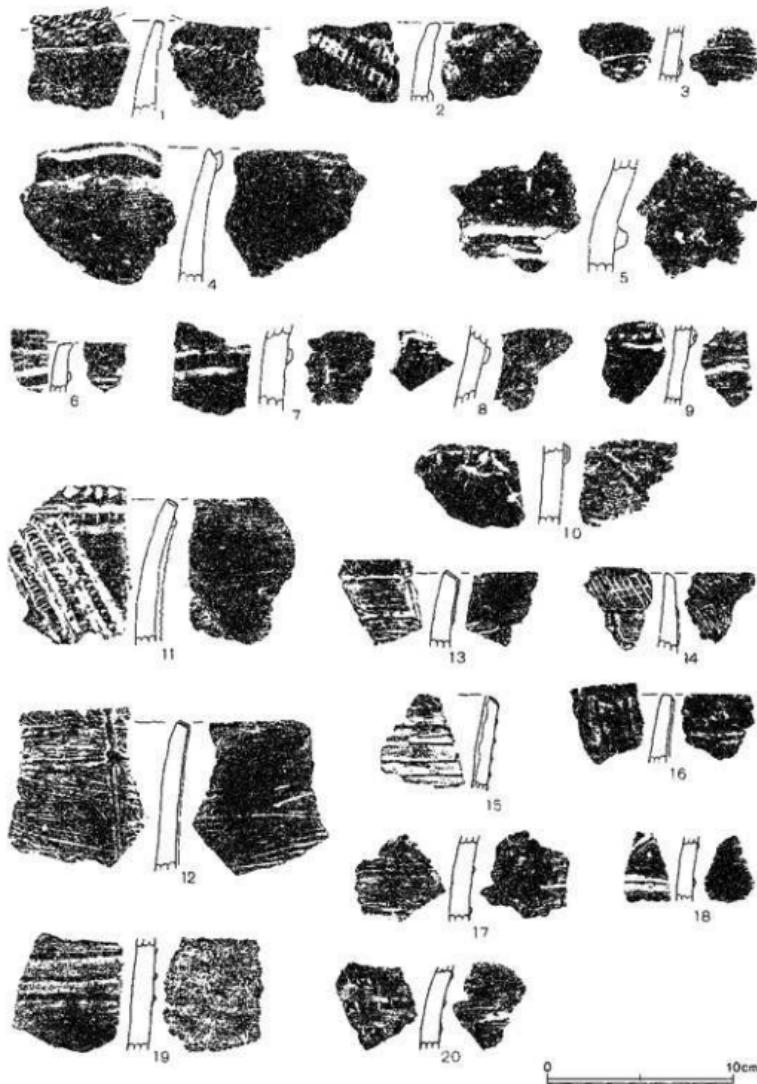
また、やや太めの細隆起線文を施文する土器では、刻目を施した隆起線文を横位水平に施文するもの（20）、3本の細隆起線文を胸部に施文するもの（19）がある。細い細隆起線文では、口唇直下からやや間隔を開けた細隆起線文を垂下するもの（16）、口唇直下と口縁部に2本の細隆起線文を巡らせ、口唇上から細隆起線文を胸部にまで垂下するもの（12、13）、幅狭の口縁部に縦位の沈線文を充填施文するもの（14）、間隔の狭い細隆起線文を横位多段に施文するもの（15）、間隔の開いた細隆起線文を水平及び斜位に施文するもの（17、18）等がある。

山内清男氏は子母口式の解説の中で、その文様要素の一つに「太い隆線」と「細い隆線」を挙げている。「太い隆線」は図示された例が乏しい。絡条体圧痕文を施文するものは容易に判断されるが、他の隆帯文土器は、田戸上層式との識別が難しい。田戸遺跡の田戸上層式は断面がカマボコ状を呈し、刻目等の加飾を施すことを特徴的とするが、子母口貝塚の隆帯文は隆帯脇をナデ付けており、扁平状を呈し、加飾が少ないことを特徴とする。若干繊維を含み、器面整形は擦痕状の丁寧な整形が施されている。第7図10、11等は田戸上層式の新しい段階に比定されるが、他の絡条体圧痕文を施文するもの以外の隆帯文土器は、田戸上層式の新しい段階から子母口式の輪を持っているものと思われる。しかし、6に見られる口縁部付近への隆帯文施文は、田戸遺跡の隆起線文化した土器と型式学的に類似しており、5の胸部への施文は田戸上層式と区別を付け難い。

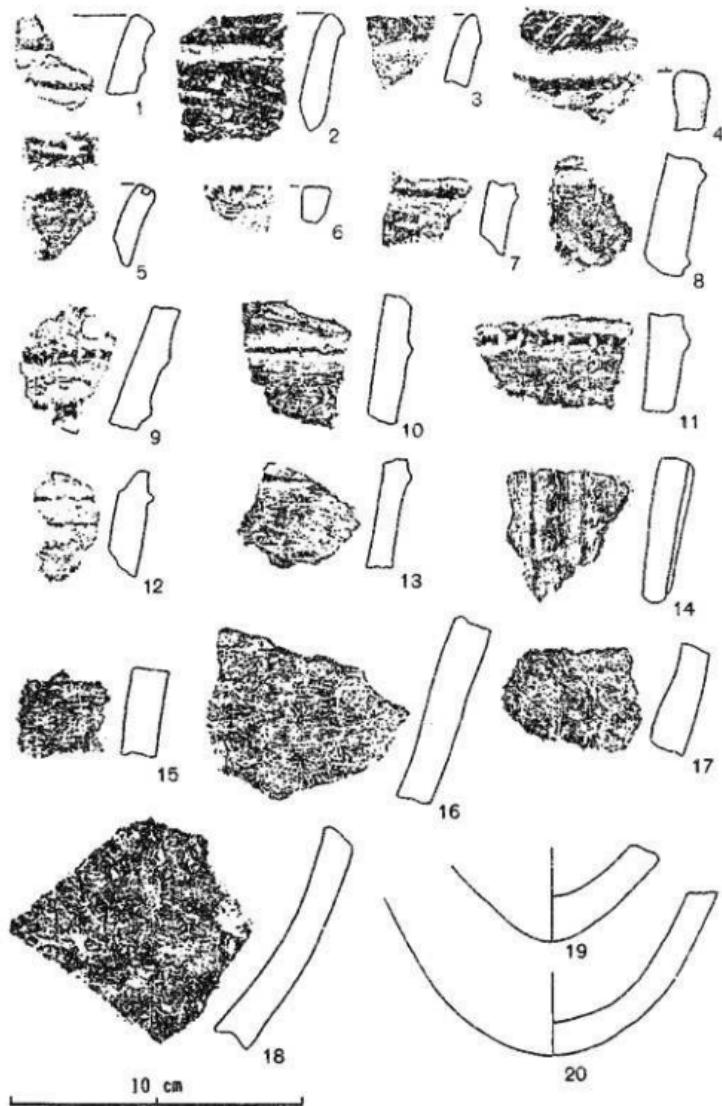
また、「細い隆線」を持つ土器は、整形が擦痕状整形と条痕文整形とに分けられ、擦痕状整形ではやや太めの細隆起線文を（16、19、20）、条痕文整形では細目の細隆起線文を施文する傾向がある（12～15、17、18）。山内氏によって静岡方面の絡条体圧痕文土器と類似すると指摘された土器は、12の様な土器と思われる。12は絡条体圧痕文はないものの、清水柳遺跡のE-3種に対応する文様構造を持つ。また、20は何本になるか不明であるが、19の3本の細隆起線文は田戸上層式段階の3本の隆帯文からの変形であることは明らかであり、さらに間隔を狭め洗練されて15のモチーフへと変遷するものと思われる。

従って、山内資料からはただ文様要素の移り変わりという面だけではなく、文様構成、土器の構造上の変化という面からも、隆帯文→太目の細隆起線文（隆起線文）→細目の細隆起線文へという変遷が明らかになるものと思われる。木の根遺跡の土器と比較すると、子母口貝塚の細目の細隆起線文の段階は型式学的に類似する部分が多く、文様構成でも第1・3・5類の要素を持つ。また、田戸遺跡と異なる点は、縦位区画線が成立していることである。子母口貝塚出土土器は田戸上層式の新しい段階の要素を持つものから、その系統を引いているもの、「木の根A式」段階までの土器群を含んでいるものと判断される。

一方、第3貝塚（A貝塚）出土土器は、比較的纏まりを持った土器群である。擦糸文系土器群と沈線文系土器群の他は、第8図に示した隆起線文系の土器群が出土している。口唇部が外削状を呈すること（1～3）、口縁部に隆起線が巡ること（1）、胸部にも2本対の隆起線文が巡ること（8、9）、隆起線上に刻みを施すこと（9、11）等、田戸遺跡の隆起線文土器に酷似した様相を持ってい



第7図 子母口貝塚出土の山内資料



第8図 子母口A貝塚(第3貝塚)出土土器

る。織痕を若干含み、擦痕というよりもナデ状の器面整形を施す。底部は丸底状のもの(20)とそれに近い尖底(19)があり、何れも子母口式というよりも田戸上層式の特徴を示している。これ等の土器群は、田戸遺跡との比較によって抽出が可能になってきた土器群でありあり、かつて、子母口式の細隆起線文土器として考えられてきたが、ここに改めて田戸上層式から子母口式の間の土器群として位置付け直して置きたい。

また、14は方向が正しいとすれば、縦位の隆起線文を持つもので、この段階としては貴重な土器である。この縦位の隆起線文は本来口縁部に配されるもので、14も口縁部付近の破片と思われる。後述するが、城ノ台北貝塚(吉田1955)では縦位隆起線文の祖型となる土器が出土している。

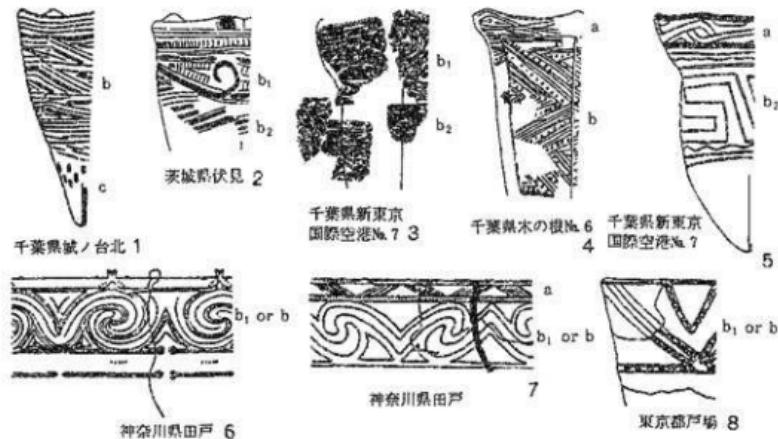
以上の様に、田戸遺跡と子母口貝塚出土土器は時期的にオーバーラップしながら、次第に「木の根A式」段階へと順次変遷していく過程が垣間見られる。そして、子母口貝塚には絶条体圧痕文の付く隆帶文土器が存在することから、子母口式段階では隆帶文と細隆起線文の要素が併存していたものと思われ、所謂細目の細隆起線文は変遷過程の最後に確立してきたものと思われる。また、田戸上層式からの変遷過程にある土器群は横位区画文系列として認識されるが、如何にして縦位区画要素を取り入れ、「木の根A式」の幅広の胸部文様帶における縦位区画文系列へ変遷するかが問題となる。城ノ台北貝塚(平野1988)では口縁部から垂下する隆帶文や、口縁部区画内に縦位に配する隆起線文等が存在し、また、清水御遺跡のE-2種では、当方では唐突に縦位の隆起線文区画が出現している。この様な土器群が如何に融合変遷していくかを、検討する必要がある。

6. 沈線文系土器群の構造的解釈

前節まで代表的な遺跡について、隆帶文系の土器群を中心にして検討を加えてきた。その結果、所謂「木の根A式」に至るまでの土器群の様相が、段階を追って纏気ながらにも把握されてきた。ここでは、「木の根A式」に至るまでの沈線文系土器群の文様帶構造の分析を行いたい。

田戸下層式から田戸上層式にかけての文様帶構成の推移については領塚正浩氏(領塚1987)、田戸上層式から子母口式にかけては阿部芳郎氏(阿部1989)の見解が示されている。両氏の変遷案を第9、10図に示した。領塚氏は沈線文系土器群全体を通じ施文帶a、b、cを設定して、それぞれの系統関係、施文帶内の文様変遷等を検討し、7段階の変遷過程を解説した(領塚1987)。第1段階を竹之内式土器、第2・3段階を三戸式土器、第4段階を田戸下層I式土器、第5段階を田戸下層II式土器、第6・7段階を田戸上層式土器に比定し、田戸下層式を2型式に細分した。田戸上層式については第6段階を古段階、第7段階を新段階に比定している。阿部氏は田戸下層式からの変遷として田戸上層段階に深鉢A類、深鉢B類の2器種を設定し、深鉢A類について子母口式段階までの変遷過程を解説した。筆者は両者における土器群の推移の把握には異論はないが、文様帶等の系統関係の把握において、若干の相違を感じる。その相違は土器群の分析の仕方、読み方が異なることに起因するものであろう。彼我の正否を問うのではなく、土器解釈の1方法として筆者の見解を述べつつ、沈線文系土器群の変遷を検討してみたい。

筆者は厳密な意味での文様帶系統論を展開するものではなく、土器群の比較の上における便宜的な解釈として文様帶及び施文帶という概念を使用している。設定した呼称帶が必ずしも領塚・阿部



第9図 領塚氏の文様帶系統図

氏の呼称と同一となるものではない。

領塚氏は器面を横帯分割する第一次区画文に挿まれた施文域を施文帯と把握し、aを口縁部施文帯、bを胸部施文帯、cを底部施文帯として捉えている。そして、b施文帯が沈線文系土器群を貫いて継承される施文帯であり、山内清男氏の1文様帯に対比されるものであると解釈し、「沈線文系土器群の段階的変遷は主要な文様帯を抽出し、その内部に展開する文様の変化を追求することによって容易に説明できる」と見解を披瀝している。

氏の第1段階の所謂竹之内式土器は胴上半部に横帯区画文の重疊構成を探るが、その全体の施文域は果して施文帯もしくは文様帯として認識されないのであろうか。また、横帯文は均等に重疊するとは限らず、良く観察すると多くても4帯程の横帯文が2帯ずつに組み合っていたり、3帯では2帯と1帯で組み合っていると解釈されるものが多い。中には、施文域全体が1帯と認識されるものもある。氏の施文帯概念はこの段階では適応されない様であるが、筆者は器面に加飾する所謂施文域（施文帯）の概念はこの段階から導入でき、既に体部文様帯における分割意識の萌芽を看取できるものと考えている。

文様帯を把握する時、常に問題となるのは口唇部と口縁部の施文帯である。キャリバー形土器では口縁部の認識が比較的容易であるが、深鉢形土器では口縁部と体部の認識が難しく、口唇部と口縁部の関係も不明瞭である。第9図1、2、4は田戸下層II式、3、5～8は田戸上層式に比定されており、2、3と4、5は同じ施文帯を継承する例として並べてみた。田戸上層式における口縁部施文帯の生成については、キャリバー形土器の出現にまで遡って検討する必要がある。領塚氏は第4段階の田戸下層I式で生成した口縁部施文帯aが、田戸下層II式の4のaへと変遷し、更に田戸上層の5のaへと系統的に変遷するものと捉えており、それぞれ相同関係として把握している様である。また、b1、b2の胸部文様帯を持つ2は3へと変遷し、b1（頸部施文帯）が口縁部施

文域（口縁部施文帯）に進出し、b 2 が胸部文様帶として展開するものと捉えている。田戸上層式における 3、5 という全く同様の文様帶構造、文様構成を持つ土器について、2通りの系統解釈が成されている訳であるが、果して両者を厳密に区分できるのであろうか。

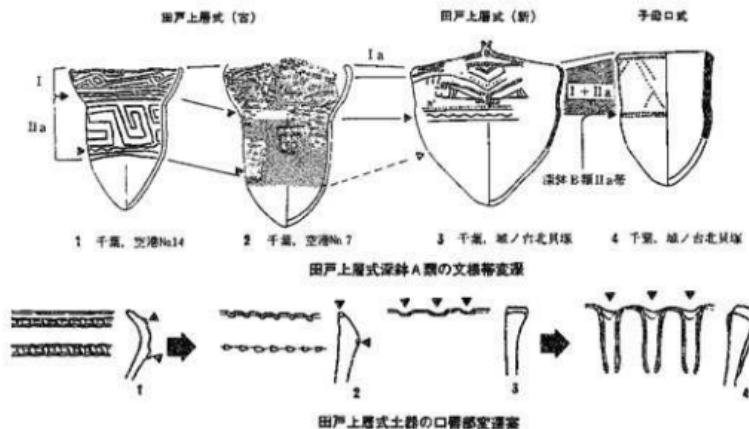
ここで、4 における口縁部施文帯 a の出自について考えてみたい。a は田戸下層式の口縁部施文帯 a から嚴然として系統変遷してきた文様帶なのであろうか。土器の最上部における施文域としては口縁部施文帯として認識されるが、その生成過程を辿ると単純に口縁部施文帯と認識するのが難しい。田戸下層式の新しい段階では口唇部が肥厚拡張し、口唇部の施文域が拡大する土器が出現する。口唇部上に施されていた刻目程度の施文帯は、施文域が拡張すると共に、本来の口縁部施文帯を取り込みながら新生の施文帯として確立する。つまり、口唇部施文帯と口縁部施文帯が融合合体し、器形の屈曲化を促進しながら新生の口縁部施文帯へと変遷して来たものと解釈される。

当初、この新生の口縁部施文帯は、縦位集合沈線文や集合鋸歯状文等の田戸下層式伝来の文様を施文するが、後に体部施文帯に出自を求められる文様構成との置換を行うという方向性が看取される。その段階の土器が 4 であり、4 の a は口唇部と口縁部の合体された施文帯で、胸部で生成された渦巻状構成を基調とした文様構成を取り入れた施文帯であると解釈される。そして、その構成を発展継承したのが 3、5 であると把握される。

この様に考えると、土器を構造体として認識する場合、施文部位としての認識と、系統的な文様帶としての認識と、文様の系統的な認識とを統合して解釈する必要性を痛感する。4 における a は口唇部と口縁部の合体と認識できるが、その結果生成された 5 の a は、口縁部としての地位を確立と共に、再び口唇部への加飾を開始する。この様に、輪廻転生の毎く生起消滅する施文域を系統的に把握することこそ、土器構造を理解する便法に成り得るものと私考する。従って、3、5 の口縁部文様帯を田戸下層式からの相同変遷過程と把握することに、躊躇せざるを得ない。むしろ、無意識の内にも器形の変化と呼応しながら相似効果として、発展継承されて来たものと把握されるのである。

阿部氏の文様帶解釈についても、同様のことが言えよう。氏の文様帶解釈は、施文部位としての割り切った解釈であり、構造的な系統解釈ではなさそうである。文様帶の減少過程を解釈するものと思われるが、抽出した A 類と B 類の文様帶としての対応関係も明確にする必要があろう。A 類と B 類の差は器形の相違のみであろうか。第10図上段 I は沈線文系土器群の中で系統的に解釈するのであれば、阿部氏の I 帯は筆者の I + II a 帯という概念に相当し、強いて言えば口唇部の刻み帯を口唇部施文帯 I 帯、口縁部分を体部施文帯上半部 II a 帯として把握できよう。この様に解釈すると、阿部氏の A 類と B 類は、器形は異なるものの潜在的に同じ構造をもつ土器であることが理解され、そこから初めて部位相互の発展・縮小・省略関係の比較検討が可能となり、またどの部位に何処の系統の文様を施文するかという系統的構造関係が理解されるのである。

第10図上段 3 は、果して A 類のみの系統なのであろうか。この文様帶構造こそ B 類の構成を持つものであり、B 類との関係はどの様に説明されるのであろうか。また、第10図下段の口唇部変遷案は筆者の解釈とは全く異なるものであることが、上記の説明で理解されよう。1 に見られる口縁部上段の隣帶と口唇部との関係が、2 の口唇部の関係になることは、田戸遺跡（金子1992）出土土器



第10図 阿部氏の文様帶系統図

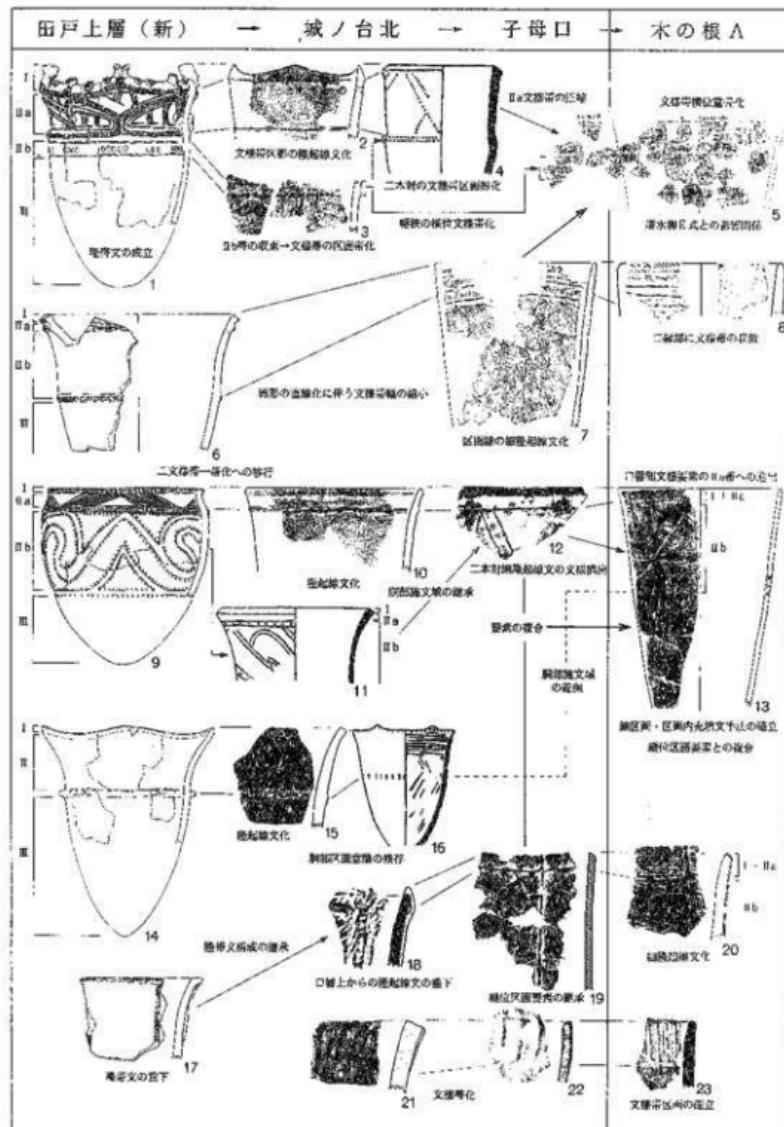
からも明らかであろう。

筆者はやはり器形の相違のみでなく、文様帶、文様の系統関係における相互補完的な影響関係を、柔軟に解釈していく必要があるものと考えている。そして、田戸上層式から「木の根A式」までの変遷については、如何に文様帶を構造的に減少し、変形、継承していくかという観点から分析が可能であると考えている。

7. 細隆起線文土器の出自と系譜

沈線文系土器群は成立時における系統的な要素として、横位施文帶重疊構造を内包している。それは、押型文系土器群の施文構造を継承して、施文具の置換により多段の施文帶を確立すること意味するが、それぞれの施文帶は継まりを持つ傾向にあり、2～3の施文帶を重疊する構造となる。この施文帶は器形の変化等を伴って、一見すると口縁部と胴部に分かれる傾向として把握される。しかし、文様帶の系統関係からは口縁部の周辺と、体部の上半と下半という多段の重疊関係にあることが理解される。そして、横位施文帶重疊構造は時期を下るにつれて主要施文域を一帯に絞っていく傾向が窺われ、最終的には一帯化の方向に向って、文様帶を減ずる方向性を持つ構造として認識される。しかし、減じられた施文帶は施文域を持たないものの、痕跡器官として継承される場合が多く、時として復活する場合がある。どの施文帶をどの様に減じていくか、また復活するのがどの部位かを把握することによって、土器群の変革がどの様に進んで行くかを分析できるものと考える。従って、本来文様施文の対象となっていた痕跡器官に対しても、系統的領域としての認識を持ち、細かい対応関係について検討を行った。

第11図は田戸上層式の新しい段階から「木の根A式」段階にかけて、土器群の推移を系列的に並べたものである。確実な系統関係にあるものとは限らないが、それぞれの要素を持つ土器群を抽出



第11図 タイプ別施文帯系統変遷図

した。先ず、田戸上層式新段階で明確には分離できないが、文様帶構成を比較できる5タイプの土器を抽出し、各々の変遷過程を辿ってみた。施文帶呼称はIが口唇部施文帶、IIが体部施文帶、IIIが体部（底部）無文帶となるが、II帶はII aの上半部施文帶、II bの下半部施文帶に分かれる場合が多い。5タイプは、以下のA～Eである。

Aタイプ(1)……幅広のI帶に加飾を施し、II a帶に主文様を展開するもので、幅狭のII b帶と幅広のIII帶で構成される土器である。

Bタイプ(6)……隆帶による横帯区画線のみ施文するもので、幅狭のI帶とII a帶、幅広のII bとIII帶で構成される土器である。

Cタイプ(9)……文様帶の幅と構成はBタイプと同様であるが、II a帶とII b帶に文様を施文するもので、II b帶に主文様を展開する土器である。

Dタイプ(14)……胸部を区画するのみの土器で、I、II、III帶で構成されるものであり、文様を施文しない土器である。

Eタイプ(17)……口唇部から隆帶を垂下するタイプの土器である。施文帶構成を把握するのが難しい土器である。

[Aタイプ系列の変遷]

Iは口唇部が内側し、やや括れを持って胸部に移行する器形を呈し、口唇部に貝殻腹縁文を施した把手及び突起状の貼付文を持ち、口唇部施文帶を加飾する。口唇部下のII a帶は、口縁部としての位置関係にあるが、体部上半部文様帶として系統的に把握した。このII a帶には、沈線文を伴う隆帶文で渦巻文を連結する主文様を施文している。幅狭のII b帶はII a帶の下端区画帶としての系譜を持つが、主文様が二段に分かれていた施文帶の下段の施文域が集約されてII b帶に変遷したものと捉えられる。このII b帶は後に文様帶の区画要素のみに留まらず、施文帶として再生し、継承されていくものもある。

隆帶文の文様要素は次の城ノ台北段階では隆起線文化し、細隆起線文へと変遷していく。ここに、細隆起線文の出自が求められるのである。施文帶幅を継承するものの、文様を施文する系統として4へ、無文化する系統として2、3へと変遷する。3の2本の隆起線文はII b帶を継承するが、直接的には2本隆帶文の区画文からの変遷である。このII b帶は痕跡器官として4に見られる如く区画線化するが、「木の根A式」段階の5では充填文を持ち文様帶化する。また、縦位区画要素等と合体し、清水柳E-3種の様な施文帶重層構造が成立する。Aタイプは、施文帶幅を狭めつつ、重層化構造を堅持するが、各々施文帶として継承されいくものである。

[Bタイプ系列の変遷]

6は胸部で区画し、上半部が屈曲して開く器形を呈するが、口唇部下に隆帶文を巡らすものである。一見、胴上半部のII帶を持つ構成と思われるが、口唇下の隆帶文の存在により、幅狭のII a帶が痕跡器官として継承されているものと判断される。文様を施文しないため、子母口段階では器形の直線化に伴って施文域が圧縮され、I、II a、II bの区画線である細隆起線文が口縁部へと集約される構成へと変遷する。更に、「木の根A式」段階では、8の様に口縁部に間隔の狭い数条の細隆起線文を施文する構成へと変遷する。

[Cタイプ系列の変遷]

Aタイプに類似する施文帶構造を持つが、II b帯に主文様を展開する点で相違する。9は幅狭なI帯に加飾を施し、口縁部に幅狭なII a帯を区画している。口縁部が内折する器形を呈するため、II a帯を口縁部施文帶と捉えがちであるが、器形を外せば胴上半部の施文帶であることが理解される。この構成は、外反する器形のIIとも同様な関係にある。同時期である11は口唇部下に幅狭の無文帯を区画することによって、II a帯を痕跡器官として継承し、II b帯に主文様を展開している。9のII b帯に展開する渦巻文は、器面を削り取る様なナゾリで施文されており、ナゾリの両脇が微隆起線状に隆起している。9のII aの隆帶文の区画線は10の隆起線文へと変遷し、更に細隆起線文化して12へ変遷する。子母口段階の12は、9、11の施文帶構成を継承しており、II b帯に2本の細隆起線文で単純な文様を構成している。この対の細隆起線文は2本隆帶文の系譜を引くものであるが、2本の細隆起線文でモチーフを描く要素は9のナゾリ状の文様描出に系譜が求められ、3に見られる細隆起線文の要素と合体して、12へ変遷しているものと思われる。そして、「木の根A式」段階では、12のII a帯部分にI帯加飾の文様要素を施文する様になり、I帯とII a帯の融合関係が成立する。この系統の土器には口唇部への加飾は見られず、縞条体圧痕文、貝殻腹縫、沈線文等の加飾要素がII a帯に進出しているものと把握されるのである。更に、口唇部から垂下して文様帯を縦位分割するEタイプ系統の要素や、胴部を幅広く区画するDタイプ系統の要素等を取り入れて、13の土器が成立する。胴部の区画文内には、既に充填文手法が萌芽している。

9と1は類似した文様構造を持つが、幅狭の施文帶を主文様施文帶の上、もしくは下に持つという点において異なる。两者とも体部文様帶の一方を減じていく方向性では共通しているが、どちらを主文様施文帶とするかによって、系統変遷する土器群が異なってくるものと思われる。

[Dタイプ系列の変遷]

胴中央部を区画する構造の土器であり、I帯に若干の加飾を施す。14は胴上半部が開く器形を呈し、口唇部を外削状に整形してI帯を形成する。I帯下は幅広のII帯を区画し、このII帯幅が12の構成と同様に13に継承され、幅広の施文域を確保する要因となっているものと思われる。

[Eタイプ系列の変遷]

口縁部から隆帶文を垂下する系統であり、田戸上層式段階における垂下する隆帶文の出自は不明である。何れにしても、田戸上層式新段階では隆帶文が成立しており、隆帶文のみのモチーフも出現していることから、この段階では何等かの系統関係で隆帶文が成立していたものと思われる。17は口唇部外端を外側に肥厚させており、上端に平坦面を形成している。外側に肥厚した口唇部外端に刻目を施し、口唇直下から隆帶文を垂下している。胴部を区画しているかは不明であるが、隆帶文の下端を解放している可能性が高い。この隆帶文の構成はやがて口唇下に隆帶文を巡らせ、口唇部上から垂下する18の構成へと変遷し、隆帶文が隆起線文化して19の構成へと変遷するものと思われる。更に、「木の根A式」段階ではCタイプ系統のII a帯を圧縮する構成と合体し、20の構成へと変遷するものと思われる。この系統は縦位区画要素の系譜として認識されるが、もう一方に垂下する集合細隆起線文の系列が存在する。

この要素の出自について、阿部氏は田戸上層式の口唇部刻目の変遷過程にその出自を求めている

様である。第10図下段の3、4からは、口唇部上面への刻目を幅を広げて口縁部までを押し潰す様に施すことによって、口縁部の器肉が隆起し、垂下する隆起線文が成立する過程が読み取れる。

筆者は口唇部の変形という点は同じであっても、出戸上層式段階の外側に張り出した幅広の口唇部の変形に出自を求めている。つまり、上端部が幅広の平坦部を形成する口唇部は、外端部方向からの押圧が施される場合が多く、押圧間が突起状を呈するものも存在する。また、押圧の間隔を狭めると小波状を呈する。この口唇部の肥厚が弱まるに連れて、押圧間の突起も低く細長いものとなり、隆起線文間に指頭によるナゾリ状の整形が施される様になる。更に、器肉の隆起が貼付の隆起線文を垂下する21へと変化し、一定の垂下幅を持ち22の様に文様帯化してくる。ナゾリの辯のためと思われるが、貼付文へと変化した段階では、隆起線文がやや斜行する場合が多い。この変遷形式は、城ノ台北貝塚出土土器が如実に物語っている。このモチーフは「木の根A式」段階では細隆起線文として間隔を狭めながら文様として整えられ、下端に区画線を伴って幅狭の施文帶として確立する。野島式段階では施文帶が広がり、代表的な文様構成として継承される。

Eタイプ系列の変遷は、文様帶を圧縮するという全体的な傾向と同調しているものと思われ、Cタイプ系列の口縁部にも要素として影響を与えていた。Cタイプ系列の13とEタイプ系列の23は、口唇部に刻目等の加飾を施していない。それは、両者の文様要素が口唇部の刻目（加飾）を出自とし、加飾要素が口縁部文様に転化する現象として捉えられるからである。子母口式土器には、口唇部外端に、押し潰す様に絡糸体圧痕文等を施文する口唇部加飾法がある。この外端部への加飾が、口唇部施文帶の変化と共に、口縁部の加飾要素へと転化する方向性は型式学的に推察されるところである。また、この文様構成は充填文要素として活用されることによって、他の系列の土器とも影響関係を持つ様になる。この様な現象の背景には相互の強い影響関係が推察され、土器は系列的な変化ばかりでなく、縦横連鎖的に変遷していることが理解されるのである。

以上、系列的な土器群の変化を概観してきたが、木の根遺跡の類別との関係を見てみたい。木の根遺跡第1類はBタイプ系列上に位置付けられるが、横走する集合細隆起線文の系譜は文様要素としての系譜も考慮される。つまり、施文帶分割線の隆起線文が集約されたものとしての系譜と、2～3本の隆起線文が細隆起線文で文様化したものとしての系譜とが存在し、両者の融合の上第1類が生成されたものと考えられるのである。第2類についても、口縁部を区画するのみの構成であるならば、Cタイプ系列のII a 帯を継承するものと思われ、縦位分割線を伴うのであればEタイプ系列にあるものと判断される。第3類はCタイプ系列と、Eタイプ系列の融合により生成されたものと判断される。第4類はEタイプ系列の中で口縁部に文様帯化する系統の要素を継承するものと思われ、第5類の文様構成はEタイプ系列でも、垂下して文様帶を分割する系統上に位置付けられる。しかし、器壁の薄い特徴は東北地方における子母口式併行期の土器群の系譜を引くものと思われる。この様に「木の根A式」段階の土器群の文様構成は、非常に単純化されているが、その要素を分解して系譜を辿る時、それぞれの影響関係の上に出来上がった土器群であることが理解され、各系統の縦横連鎖構造が浮き彫りにされるのである。

細隆起線文の出自については、熊谷常正氏は田戸上層式からの漸進的な変化が関東地方に於て細隆起線文を生み出し、東北地方に流入したとする仮説を立てており（熊谷1974）、同様な見解は前述

した様に瀬川氏も示している。筆者も今まで述べて来た様に、田戸上層式からの変化において細隆起線文の出自を捉えている。しかし、両者との相違は、田戸上層式とティピカルな野島式の間に城ノ台北段階と子母口段階と「木の根A式」段階という3段階の変遷過程を想定おり、所謂子母口式を介在させて野島式への変遷を理解している点である。

段階的な設定については、本来型式名称で示すのが妥当であるが、型式の内容吟味が不十分であるため、今回は遺跡名称で表現した。城ノ台北段階は出戸遺跡の最も新しい段階との比較検討により設定した段階で、後日、田戸上層式の最新段階もしくは直後型式として設定したい段階である。従来、子母口式の古段階として認識されてきたが、田戸上層式系統の要素を強く繼承していることから、子母口貝塚の「子母口式」との相違が明白である。筆者は子母口貝塚で設定された土器群を子母口式とする立場にあるので、城ノ台北貝塚の子母口式を子母口式に比定するには躊躇せざるを得ない。文様要素の変化で言えば、この段階は隆帯文から陸起線への変化の段階である。

子母口式は田戸上層式の系統を若干残すものの、東北地方の沈線文系土器終末期の土器群との影響関係において成立しており、分布範囲においても型式的に安定した様相を持っている。しかし、子母口式の型式内容が吟味されていない現在、段階として子母口という名称を使用したい。この段階は隆起線文から細隆起線文への変化の時期であるが、細隆起線文は散見される程度で主要文様要素とはなっておらず、比較的単純なモチーフ構成を探るのが特徴的である。

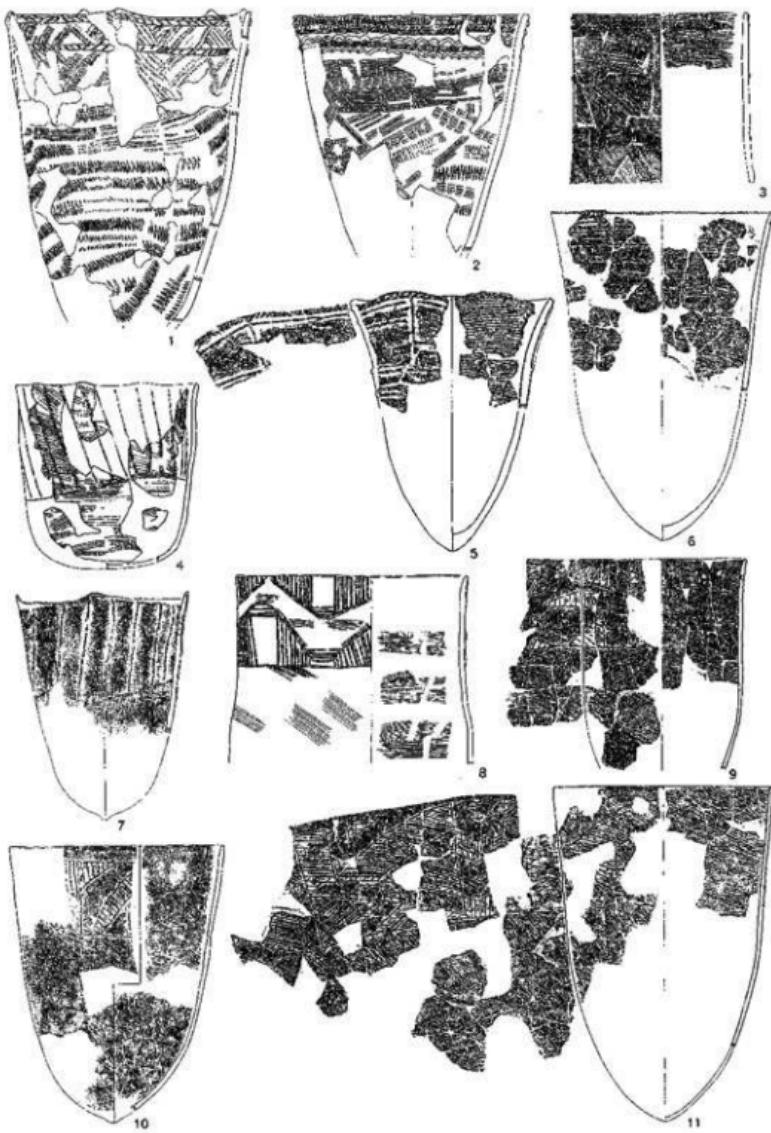
「木の根A式」段階では、子母口式の文様要素を繼承するが、沈線文系土器群の型式要素を払拭し、細隆起線文を主体とした新生の土器群が生成される。地文に条痕文を施文することが一般的となる等、所謂野島式以降に続く条痕文系土器群の成立期と認識される段階である。この段階の土器群は、文様要素のみで子母口式の新しい段階として認識されてきたが、学史的にも野島式の古段階と不分離な関係で把握されてきたことは明らかである。「木の根A式」は土器群の組成、文様帶構造、文様構成等から、子母口式とは一線を画する土器群であり、後続する土器群との構造的な系統関係から条痕文系土器群の初頭期に位置付け直して評価したい土器群である。従って、子母口式はその系統性及び併行関係にある土器群との関係から、沈線文系土器群の終末期に位置付られるものとして把握される。子母口式は古段階とされた城ノ台北貝塚の土器群と、新段階の「木の根A式」を分離して考えることによって、型式内容が一層明らかになるものと思われる。

8. 各地域における細隆起線文土器の様相

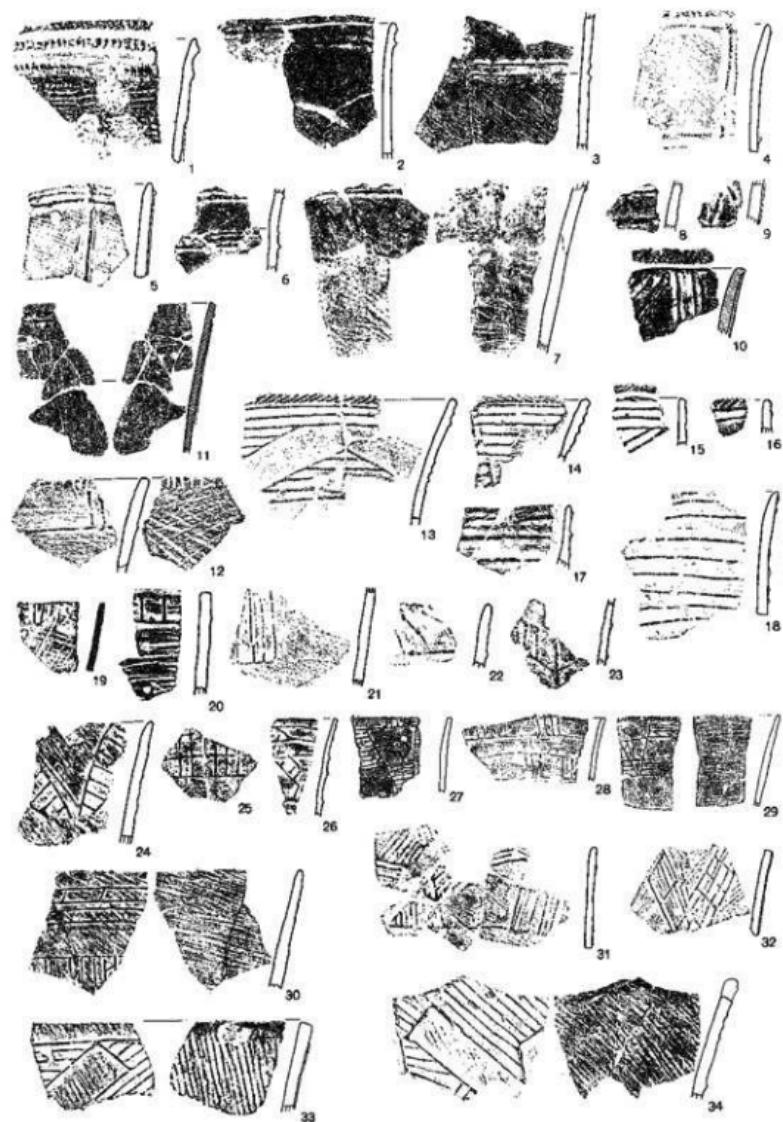
細隆起線文土器は田戸上層式からの変化の過程に出自が求められ、系統的に「木の根A式」段階へと変遷する過程が検討された。その意味では、細隆起線文という要素は田戸上層式以降野島式に至るまで連続と変遷していることになるが、土器群の変遷としては系統的な縦横連鎖構造を持ちつつ、野島式に至るまで何階梯か型式的に変化している。田戸上層式から野島式への直接的な、変遷としては捉えられない。ここでは、各地域における細隆起線文土器の変遷を概観して、地域相を検討すると共に、どの段階において広域編年が可能となるかを検討したい。

【東北地方】(第12図、第13図)

東北地方は大きく北東北と南東北に分けられ、量的に少ないものの細隆起線文土器は両地域に存



第12図 東北地方の細隆起線文系土器(1)



第13図 東北地方の細隆越縞文系土器(2)

在する。南東北では子母口式が存在するが、北東北では直接比定される土器群は存在しない。隆起線文土器の系譜を辿ると、吹切沢式には隆帯文が存在する。大久保遺跡（T.藤1988）では口縁部に間合を開けて隆帯文を巡らすもの（第12図1）と、口縁部に2～3本配するもの（同2）とがあり、隆帯文上に絶条体圧痕文を施文する土器が出土している。胴部には貝殻模様の鋸歯状文や結節状に引きずった貝殻文を施文しており、貝殻文はモチーフ状の構成を取る部分もある。口縁部に巡る2本対の隆帯文は、売場遺跡（三宅1985）でも出土している。第13図1は隆帯文が隆起線文化しているが、胴部に引きずった貝殻文を施文しており、その意味では吹切沢式に比定される。この口縁部の隆帯文の構成は、同じく売場遺跡の同図2の細隆起線文土器の構成に変遷するものと思われ、地文の貝殻文も条痕文へと変化している。また、胴部に2本対の細隆起線文を巡らすもの（第13図3、6）や縦位の細隆起線文を垂下するもの（同4、5）も存在する。

第12図3は口縁部と胴部に2本対の隆起線文を巡らせ、中央に1本の隆起線文を配する構成を探り、細かな条痕文を施文する。胴部の2本対の隆起線文は縦位の分割線を加へ、段違いの平行を呈する。これ等は木の根遺跡第1、3、5類と同様な文様構成を持つもので、北東方地方に於ても沈線文系土器群から条痕文系土器群への変遷期に、関東地方と同様相を呈する土器群が存在することを示している。また、第13図18の様に、横位の細隆起線文を多条に施文するものもあり、文様要素としての隆起線文の系譜を引くものも存在する。一方、愛宕原遺跡（武田1989）ではこのモチーフを絶条体圧痕文で施文する土器があり、文様要素と文様構成の複合影響関係が把握される。隆帯文を持つ吹切沢式の土器を城ノ台北から子母口段階に、売場遺跡の細隆起線文土器を「木の根A式」段階に位置付けて考えて置きたい。

その後、細隆起線文は充填文要素として併行細隆起線文間に施文されて、梯子状文を構成する様になる（第13図23）。この段階は比較的単純なモチーフが多く（同21、22）、幅広の施文帯にモチーフが展開される（第12図8）。この段階は、楓木I式に代表される段階であり、関東では野島式の古段階に入っている。

更に、細隆起線文土器は細く微隆起線文化して、幾何学状のモチーフを描く点では同様であるが、区画内充填文要素が細密となり、集合細隆起線文を充填施文する構成になる（第13図31、32）。筆者の観察では多くの細隆起線文は貼付手法であり、ナゾリ手法で器肉が盛り上がる微隆起線文は少ない様である。後者の細隆起線文手法は「ムシリ型微隆起線」（三宅1985）と呼ばれているが、関東地方の野島式では凹線文状の沈線文間に器肉が微隆起線文化するものに類似する。この沈線文とともに微隆起線文とも判断し難い要素は、間隔の狭い充填文要素として使用され、若干新しい様相を持っており、間隔の狭い細隆起線文と同様の効果を持っていると言えよう。北東北地方には細隆起線文と沈線文の複合した土器が少ないと考慮すると、第13図31、32の様な細かい細隆起線文土器は沈線文への移り変わりの段階か、沈線文の代りに同様効果を表しているものと推察され、細隆起線文土器の中にあっても、後出の土器と判断される。従って、野島式段階に比定される細隆起線文土器は、モチーフの変化とともに細分される可能性が高い。

南東北では天光遺跡（磯上1989）で、平行する細隆起線文と（第13図7、8）、その間に縦位線を加える（同9）土器が出土している。また、竹之内遺跡では子母口式が出土しており、若干新しい

様相を呈する第12図5も出土している。5は口唇下と胸部に細隆起線文を巡らせて施文帯を区画し、継位の細隆起線文で分割し、横位の細隆起線文を粗く配している。胸部は間隔を開けた2本の細隆起線文で区画し、この間には継位線の要素は存在しない様である。胸部の区画線は、Aタイプ系列におけるIIb帶の継承と思われ、この後、この施文域に継位線の要素が加わり副施文帯化して、体部文様に組み込まれていく変遷を辿る。5は口唇部や細隆起線文上に絡条体圧痕文を施文するが、同様な例は月ノ木B遺跡（第13図13、14）（黒坂1989）、唐松A遺跡（同15）（西間木1983）、前原A遺跡（同16）（井1991）からも出土している。これ等の土器は併行する間隔のやや狭い細隆起線文を施文するため、竹之内遺跡例とは文様構成が異なる。竹之内遺跡の横位多条の細隆起線文土器は（第12図6）間隔がやや広く、月ノ木B遺跡との時間的な差は不明であるが、文様構成の系統的な差異として捉えられる可能性が高い。月ノ木B遺跡第13図13の無文部分のモチーフは、売場遺跡第12図8の無文部分のモチーフに類似しており、両者が時間的に近い関係で系統的に変遷関係にあることが推察される。また、月ノ木遺跡ではやや幅広に口縁部を区画する土器が出土しており、細隆起線文が区画線まで垂下している（第13図12）。口縁部裏の刻目状の短沈線文は、常世式等の口唇内端部への刻みに系譜が求められる。

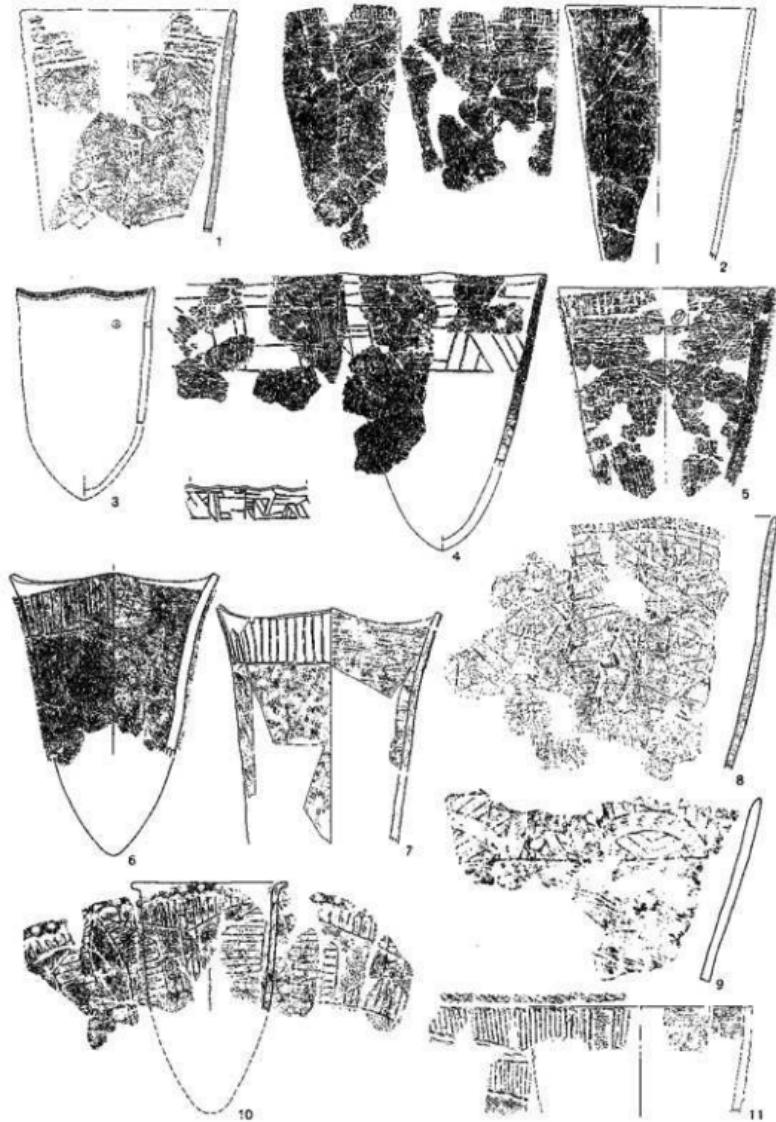
木の根遺跡と比較すると、竹之内遺跡例が第3類に、月ノ木遺跡例が第1類、第4類に相当する土器群である。また、第13図11は第5類土器に相当し、非常に関東的な土器である。子母口段階では絡条体圧痕文の付く隆帯文は存在するが、明確な細隆起線文土器は少ない。第13図10の八重米坂A遺跡例（吉田1990）は、口唇部に絡条体圧痕文を施文し、口唇部直下から3本対の細隆起線文を継位、斜位に施文するもので、位置付けが難しいが、子母口段階の可能性がある。

その後の細隆起線文土器は、口縁部に短く垂下する構成のもの（第13図19、20）や、口縁部施文帯がモチーフ化して体部文様帯に同化するもの（第12図11、第13図27～29）、口縁部施文帯が意識されているもの（同30）、口縁部を区画し体部文様帯のみのもの（第12図10、第13図33）、口縁部を区画せず、口唇直下から体部文様を展開するもの（第12図9、第13図24、34）等が存在する。また、口唇部からやや間隔を開いた細隆起線文を幅広の施文帯に垂下する構成は、Eタイプ系列に系譜が求められ、北東北では上里遺跡（第12図4）（高橋1983）、南東北では大畑F遺跡（廣岡1991）に見られ、安定した文様構成になっている。器形の相違は、土器の造りとしての系統差によるものと思われる。南東北地方では土器の造りに地域的な系統性を持ち関東地方とは異なるものの、「木の根A式」及び野島式段階の土器群は文様構造等質的な類似性が高まり、関東地方と連動して変化変遷しているものと判断される。

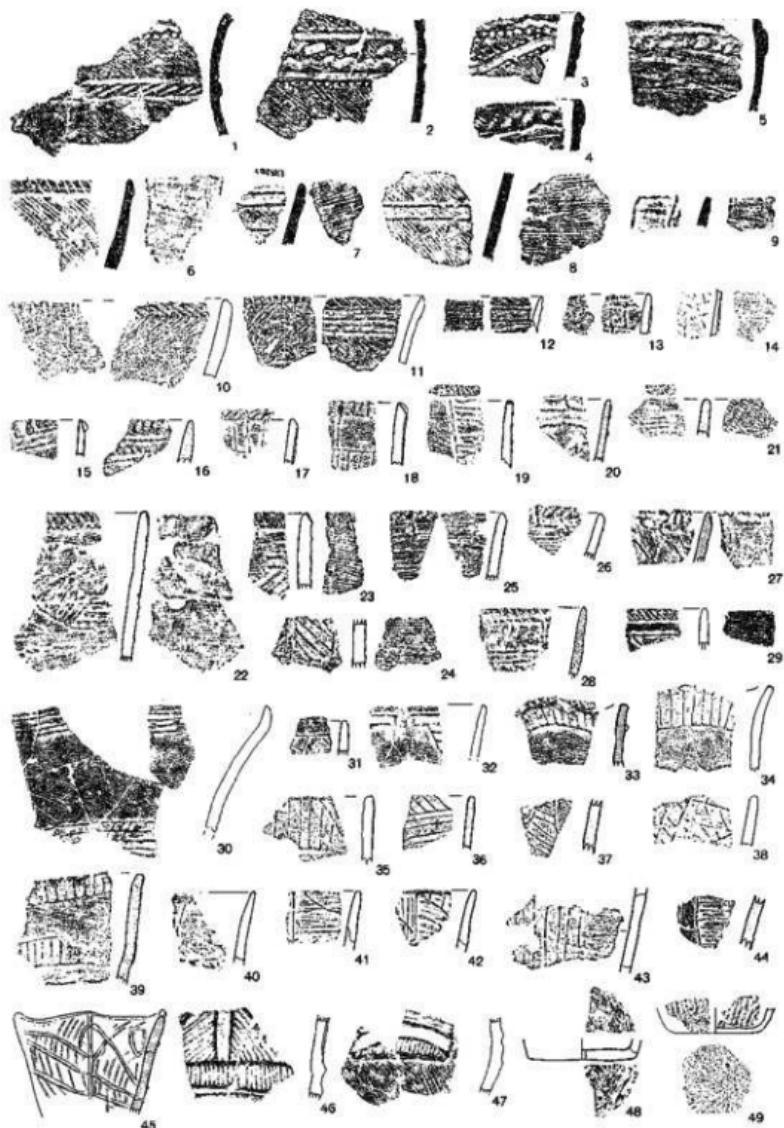
【北東関東地方】（第14図、第15図）

関東地方も明確には区分できないが、南東北地方の関連が強い地域として群馬県、栃木県、茨城県、千葉県を便宜的に一括し、北東関東地方とした。そして、埼玉県、東京都、神奈川県、静岡県東部を西南関東とした。

北関東地方の群馬県では子母口段階の土器群が不明瞭であり、栃木県では南東北地方の系統を引く土器群と子母口式土器が出土している。雲入遺跡（塙1966）では絡条体条痕文と思われる細かな条痕文を地文として、口縁部に沈線の小波状文を施文し、胸部に絡条体圧痕文の付く隆帯文を巡ら



第14図 関東地方の細隆起線文系土器



第15図 北東関東地方の細縦起線文系土器

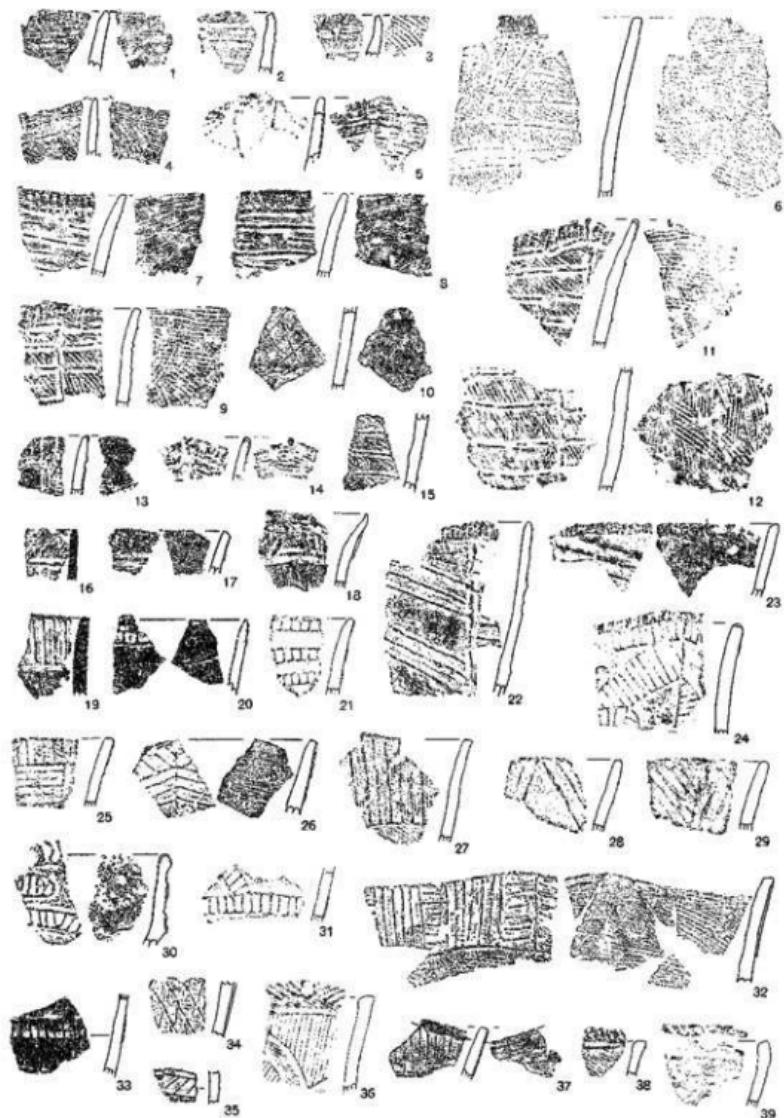
す土器（第15図1）と、同様で沈線文を施文する土器（同2、3）と、口縁部の太い隆帯文に絡条体圧痕文を施文する土器（同4、5）が出土している。両者の共時性は現在のところ不明であり、1～3は子母口式直前と考えられている。1、2に見られる沈線の小波状文は第12図2の吹切沢式に見られる波状沈線文に近似しており、絡条体圧痕文の付く隆帯文も要素として類似する。また、同様な段階の遺跡として出流原小学校内遺跡（矢島1984）が存在する。土器は胴部施文域を広く設定して縦位の区画要素を持つ土器と、横帯区画文を重層する土器、口縁部の隆帯に絡条体圧痕文を施文する土器が出土している。前二者は南東北系統の要素を色濃く持っているが、絡条体圧痕文土器との共時性は、やはり不明である。絡条体圧痕文土器は雲入遺跡の絡条体圧痕文土器と近似しており子母口式に比定されるものと思われるが、両遺跡における南東北系の土器群との関係は現在のところ不明であるが、別稿において検討する予定である。茨城県の子母口段階では石山神遺跡（上野1990）が存在するが、雲入遺跡、出流原小学校内遺跡と同様に、細隆起線文土器は殆ど出土していない。北関東の子母口段階では、細隆起線文は未発達の様であり、隆帯文が盛行している。これは、東北地方と同様な傾向として捉えられる。

東関東の千葉県では子母口式が安定して存在しており、代表的な遺跡に新東京国際空港No.7遺跡（西川1984）、割山遺跡（高橋1986）、椎ノ木遺跡（高橋1987）等がある。椎ノ木遺跡では細隆起線文土器が出土しているが、No.7遺跡、割山遺跡では出土していない。椎ノ木遺跡の細隆起線文土器は、木の根遺跡の第1類、第3類、第4類を含み、「木の根A式」の安定した組成を示している。東部関東に於ても、子母口段階の細隆起線文は未発達の様相を呈する。第14図1は前述した様に、文様帶区画線が圧縮された姿として捉えられる。

「木の根A式」段階では、茨城県、千葉県に良好な遺跡が存在する。茨城県では常陸伏見遺跡（第15図6～9）（小野1979）、安塚遺跡（同10～14）（橋本1980）、奥山C遺跡（同15～21）（小河1986）で出土しており、何れも木の根遺跡第1類、第3類土器で構成されている。外削状を呈する口唇部に絡条体圧痕文を施文することが特徴的であり、口唇部のI施文帯と口縁部のIIa施文帯とが融合合体する様子が窺える。安塚遺跡10、11の口縁部裏面には、縦位の絡条体圧痕文を施文しており、この要素は月ノ木B遺跡第13図12と同様に、沈線文系土器群終末期の口唇部内端に施す刻目に系譜が求められる。また、18の口唇部絡条体圧痕文は細隆起線文と共に、幅狭な口縁部のIIa帯と化している。

この様な口唇部外端を潰す手法は、千葉県復山谷遺跡（同22～24）（田村1982）、吉田馬々台遺跡（同25、26）（古内1980）、中山新田I（同27）（原田1986）、阿玉台北遺跡（同28、29）（矢戸1975）でも出土している。22～24は文様構成としては木の根第3類的であるが、区画内充填文手法が確立しており、細隆起線文上には絡条体圧痕文を施文している。月ノ木B遺跡や竹之内遺跡と共通する手法である。

一方、口縁部の幅狭な施文帯IIaが確立している土器も勢至久保遺跡（第14図2）（飯塚1982）、小田部新地遺跡（同5）（山口1984）、泉北側第2遺跡（同8）（高橋1991）等で存在する。2はCタイプ系列に位置付けた土器であり、木の根遺跡第3類と第5類の融合形態として把握される。口縁部幅狭IIa帯に絡条体圧痕文を施文し、胴部の区画文には充填文手法が萌芽している。5は口縁部



第16図 埼玉県の細隆起線文系土器

のみに縦条体圧痕文を、胴部には「×」状の文様を1箇所に施文している。8はIIa帯を狭く設定し、幅広のIIb帯に2本対の細隆起線文で対弧状のモチーフを基調とした区画文を施文している。口唇部を潰す手法と、IIa帯を確立する手法はタイプを異にするが、時間的な差異とするよりも、タイプ差として把握して置きたい。しかし、胴部モチーフの構成によっては、若干の時間差として捉えられるものもある。30は口縁部と胴部に4~5本の細隆起線文を配して区画し、胴部区画線には斜位の短い細隆起線文を縱区画要素として施文している。口縁部の内轉する器形はやや古相を帯びるが、各要素から「木の根A式」段階に位置付けられるものと思われる。

野島式段階では、Eタイプ系列下にある口縁部に細隆起線文を垂下する土器（第14図7、第15図33、34）が安定して存在するが、「木の根A式」段階との識別は難しい。これ等と施文帯幅を同じくして、鋸歯状文を集合細隆起線文で構成する土器が出現したり（同35、36）、細隆起線文の梯子状文（同38、39）や曲線区画文内の充填文手法（同37、44）が確立している。39は口縁部に段を持ち、施文帯の上下に梯子状区画文を施文するもので、施文帯区画要素が文様化した例である。これ等の要素は野島式の棒状区画文とは別に、南関東的な様相を持っている。一方、群馬県の前中原遺跡（能登1982）では無繊維で器壁の薄い東北的な土器群（同40~43）が出土しており、平底（同48）も出土している。同様な平底（同49）は、茨城県南三島遺跡（齊藤1985）でも出土している。その後、縱横の区画文を主体とする系譜では、同45の様に整然としない区画文も出現する。そして、区画内充填文手法の系譜では、密な細隆起線文が凹線文間の隆起した微隆起線文へと変化するものが出現する（同46、47）。46の胴部区画は、充填文要素が見られるもの、Aタイプ系列のIIb帯の繼承要素と判断される。区画文が文様要素へと転化している事例であり、ある意味では施文帯の復活として捉えられよう。以上の様に、北東関東地方は南東北的な土器群が若干含まれるもの、野島式段階では土器群の変化に南関東地方と連動する様相が窺える。

【西南関東地方】（第14図、第16図、第17図）

埼玉県、東京都、神奈川県、静岡県東部地方の広範な地域を括することは難しいが、大枠として概説する。子母口段階では隆帯文（第17図1）は目立つものの、細隆起線文は少ない。堂ヶ谷戸遺跡（品川1988）では口唇直下及び口縁部に集約されて、刻目の付く細隆起線文が施文されており（同2、3）、半蔵窪遺跡（阿部1989）では田戸上層に系譜を引く鋸歯状のモチーフ（同4）が、また、横位多条の細隆起線文（同5）が、刻目を伴って施文されている。同様の構成は、子母口貝塚（同6）からも出土している。また、Eタイプ系列にある縦位の集合細隆起線文は、子母口貝塚やタルカ作遺跡（田村1985）で出土している。子母口段階の細隆起線文土器を抽出すると、未発達な様相が窺える。一方、隆帯文の付く土器は縦条体圧痕文と併施文されるものが殆どで、西南関東から静岡県東部にまで分布しており、垂下する隆帯として施文されているものもある。

「木の根A式」段階では、埼玉県に良好な資料が多い。埼玉県では中宿遺跡（安岡1963）、高輪寺遺跡（第16図1~3、15）（青木1979）、官ケ谷塔貝塚（同4、5）（山形1982、1985）、明花向遺跡C地点（同6）（金子1984）、猿貝北遺跡（同7~14）（金子1986）、呉原遺跡（第14図4）（吉田1985）等で出土している。口縁部の幅狭な施文帯には縦条体圧痕文を施文するものが多く、6、9、11、16は貝殻腹縁文を、13は沈線文を充填施文する。埼玉県でも大宮台地以東の東部地域では、「木の根

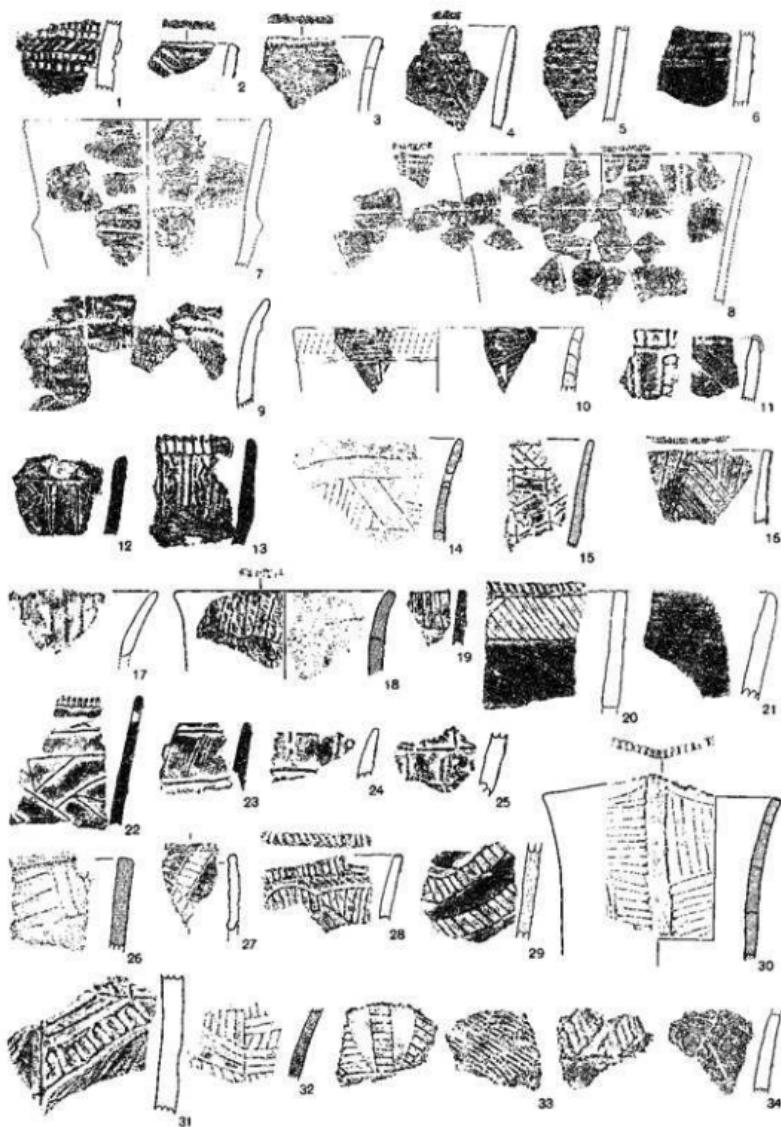
A式】土器が多く検出されているが、県西部地域ではこの段階の土器群は判然としない。東部地域の土器群は、千葉県西部地域の土器群と類似した構造を持ち、口端部を潰す茨城県的な手法は少ない。区画の構成も、間隔の広い細隆起線文を縦横に配するのみの、比較的単純な構成のものが多く、地文に明瞭な条痕文を施文する点が特徴である。モチーフは縦横に施文するもの以外では、2本対の細隆起線文を斜位（第16図6）及び鋸歯状に組み合わせて幾何学文を構成している（第14図4）。第16図6は斜位の区画線が最下端にまで及ばず、下2本の細隆起線文に文様帶の区画文としての要素が看取される。これはAタイプ系列におけるII b帯の継承要素と思われ、竹之内遺跡第12図5の胴部区画文と同じ構造を持つものと判断される。

井沼方遺跡第8次調査（小倉1986）の第16図22、23は口縁部に幅狭の施文帶を区画し、縦位の短沈線文を充填施文しており、胴部に縦位の細隆起線文を垂下して文様帶を分割し、それにめがけて3本対の細隆起線文を枝状のモチーフに施文するものである。野島式の文様構成に近付いており、或は野島式段階の可能性もある。また、微妙な段階の土器として同19がある。Eタイプ系列の土器で野島式との識別が難しいが、施文幅が狭く、擦痕状の整形であることから「木の根A式」段階と判断される。野島貝塚（赤星1948）貝層下の土器と同じ段階であろう。野島式段階では南関東的な30や在地的な32、37が存在する。

一方、武藏野台地を中心とする西部地域では、貝塚山遺跡（金子1985）で良好な土器群が出土している。出土土器の大半が細隆起線文土器で、口縁部に幅狭の施文帶を区画してやや太めの隆起線文を充填施文するもの（第16図18）、細隆起線文の梯子状文でモチーフを描くもの（同21、31）、口縁部にやや幅広に集合細隆起線文を垂下するもの（同27）、鋸歯状に組み合せるもの（同28、29）等が出土している。また、野島式の口縁部に、絶条体圧痕文を施文したもの（同36、38、39）も存在する。そして、25は口縁部の幅狭施文帶に縦位の細隆起線文を充填施文し、胴部には縦横の細隆起線文で区画文を構成して、「木の根A式」と同じ文様構造を持っている。今宿遺跡（小渕1987）の24も同様な構造を持ち、胴部には細隆起線文のやや幅広の梯子状文で幾何学モチーフが展開されている。文様自体は野島式として判断されるが、その構造内に「木の根A式」の系統要素を強く残しており、時間的には近接しているものと思われる。34の斜格子文は、10からの系譜を引く。

以上、埼玉県内でも、東部、西部を問わず野島式のモチーフは広範に安定して存在しており、今のところ「木の根A式」とは若干の時間差が看取られる。

東京都及び神奈川県では所謂清水柳E式との影響関係が窺われる土器と、木の根遺跡第3類、第4類、第5類土器が出土している。田中谷戸遺跡（安孫子1976）の第17図7、8は先に述べた様に清水柳E式の影響を受けているもので、大平A遺跡（漆畠1980）の同9は胴部の絶条体圧痕文施文域が沈線文で幅広く区画されており、口唇下から沈線文が垂下している。また、10は口縁部に貝殻腹縁文を施文し、細隆起線文を垂下するもので木の根遺跡第4類と第5類の融合した要素として把握される。細隆起線文が口縁部から垂下して文様帶を区画する土器は、小山台遺跡（谷口1984）や赤羽台遺跡（小林1989）でも出土している。赤羽台遺跡例は口縁部の幅狭区画帯に絶条体圧痕文を施文し、やや間隔を開けた細隆起線文を垂下するのみのモチーフであり、「木の根A式」に極めて近似した様相を呈する。神奈川県では吉井城山遺跡（岡本1962）から木の根遺跡第3類相当の土器（第



第17図 西南関東地方の細縞起線文系土器

17図22、23)が出土しており、静岡県桜台遺跡でも平行細隆起線文間に縦位の細隆起線文を配する、第3類相当の土器群(同24、25)が出土している。口縁部に3本の細隆起線文を巡らす土器(同21)は金が谷台遺跡(岡崎1982)で出土しており、第15図30に近い様相を持つ。

ヒタイプ系列の集合細隆起線文を垂下する土器は、野島貝塚の貝層下や鶴ガ島台式遺跡(同19)(岡本1961)でも出土しており、野島式段階では施文幅を広げたもの(同17、18)へと変遷している。野島貝塚出土の第14図5(岩本1993)は典型的な土器であり、口縁部が波状を呈する。器面は擦痕状の整形が施され、口唇部に刻目が施される。このモチーフ構成で口唇部に刻目を施すものは珍しいが、茨城県や千葉県の例からすると、波状を呈するものは野島式のものが多い。また、細隆起線文による、集合鋸歯状文を施文するもの(第17図16、20)も安定して存在する。

「木の根A式」の口縁部区画の系譜を引く要素は木戸上遺跡(石川1985)の同11、夏島貝塚(芹沢1958)の同12、13、堂ヶ谷戸遺跡の同14、新作小高台遺跡(増子1982)の同15、に継承されている。12、14では区画の意識のみが継承され、13は垂下する集合細隆起線文、15では細隆起線文の集合鋸歯状文を施文する。また、細隆起線文の梯子状文でモチーフを構成するもの(同27、29、31、34)、曲線区画文内に集合細隆起線文を充填施文するもの(28、33)、区画文内に細かく充填施文するもの(同30、32)等、野島式段階の要素は安定している。

静岡県山ノ神遺跡(小野1975)の第14図9は谷沢良光氏によって子母口式段階に位置付けられ(谷沢1977)、瀬川裕市郎氏によって野島式の新しい段階に位置付けられている(瀬川1983)。同図8と比較すると、モチーフの系統性は明瞭であり、幅狭の口縁部施文帯が消失し、文様帯を圧縮してモチーフを簡略化すると9ができあがる。従って、「木の根A式」段階よりも若干新しい野島式に比定されるものと思われる。静岡県東部地域の土器群については、清水柳遺跡出土土器の検討の項で概説したが、絹条体圧痕文をメルクマールとする清水柳E式系と、関東的な細隆起線文土器とが「木の根A式」段階で融合し、オーバーラップしながら野島式へと変遷するものと考えている。

[地域相の総括]

以上、各地域の細隆起線文土器を概観してきた。東北地方では貝殻沈線文系終末期の土器群の特徴である薄手・無繊維の技法を継承して条痕文系土器群が成立し、北関東地方にもこの系統の要素が継承された土器が成立する。一方、比較的厚手で若干繊維を含む子母口式の要素も文様要素と合わせて、南東北地方まで影響を与えていている。在地的な土器造りの技法と、関東系である田戸上層式以降継承してきた子母口式の文様構造、文様要素とが系統的に融合されて「木の根A式」段階の細隆起線文土器が成立し、関東地方の構造的な変遷に歩調を合わせながら、東北地方に於ける野島式段階の土器群へと変遷している。興味深いことは、青森県先場遺跡に見られる様に、貝殻沈線文系土器群から条痕文系土器群への変遷期に於ける隆蒂文から細隆起線文への変化過程が、該期間東地方の変遷過程と同様相を呈することであり、「木の根A式」段階に至って共通する広範な土器群が成立し足並みを揃えることである。

関東地方では、近年子母口段階の良好な遺跡が増えており、子母口式の多彩な内容が明らかになりつつある。田戸上層式以降、城ノ台北、子母口段階を設定することによって、細隆起線文土器の出自、系譜関係を検討してきた。その結果、子母口段階では要素としては存在するものの、主要な

文様要素と成り得ていないことが把握された。子母口式の隆起線文系の文様要素は北関東では隆起文を、南関東では隆起線文、細隆起線文を主体とするが、出自の中心的な地域と思われる南関東地方においても、細隆起線文土器の実態は不明瞭であり、量的にも少ない。

その後の「木の根A式」段階では北関東、南関東とも足並みを揃えて細隆起線文土器が確立し、主導的文様要素となる。地域によって、主たる文様構成の相違が地域性として現れているが、何れの系統変遷上の要素を主に継承するかによって現れる相違であり、組成を成す文様構成を分析すると木の根遺跡類別土器の何種類かの組み合せが存在し、共通した様相が窺える。東関東ではCタイプ系列の木の根遺跡第3類、第4類相当の土器群が主体となり、南関東ではA・Eタイプ系列の第1類、第5類相当土器が主体となっている。

また、東関東を中心とした地域では条痕文施文が一般的となるが、静岡県東部地方を含めた南関東地方では、条痕文が弱く、擦痕状の器面整形という田戸上層式伝来の在地的な土器製作技法の上に、細隆起線文が主要文様要素として展開する。そして、文様要素として使用される縦条体圧痕文は北東関東地方では通常の縦条体圧痕文を短い単位で施文するが、清水柳E式を代表とする西南関東では列点状の縦条体圧痕文を縦状に施文する相違がある。

これ等、青森県から静岡県東部までの土器群は、各地域性を持つ土器群を輩出しており、それぞれ小さな型式群として把握され、土器製作技術、施文具、施文手法等細かな要素の比較検討の上、型式内容が整備されなければならない。この細かな対比は型式学の基本的な作業であり、相違を明らかにする点に力が注がれ、細かく細分化する方向性を持つ。一方、土器群は時として汎東日本的あるいは汎日本的な規模において、一定のレベルで同様に変革する時がある。これは所謂モードの変換として認識され、これ等を検討する場合は共通項を明らかにする点に力が注がれ、大きく総括する方向性を持つ。縦文土器の編年学的研究は専門研究の統合の上に成り立っているが、ややもすると相違点を強調することに力が注がれる場合がある。後者の研究は、広域な型式学的ホライズンを設定することによって、編年学的研究の最も基本である広域編年の有効な手段と成り得る。

筆者は細隆起線文という要素を鍵として、沈線文系土器群から条痕文系土器群への転換を、土器の構造的変遷を検討することによって明らかにしようと試みた。その結果、「木の根A式」期は汎東日本的な土器群の共通性を持ち、条痕文系土器群への変換期であると認識されるに至った。壳塼遺跡第VI群D2類、竹之内遺跡微隆起線文系a類、木の根遺跡第III群a種、清水柳E-3・4類を型式学的ホライズンとして設定し、以降に展開する土器群との構造的な繼続性から、条痕文系土器群の成立期として認識したい。

従来、子母口式の新しい段階として認識されてきた「木の根A式」土器を、文様要素にとらわれず子母口式から切り放して、条痕文系土器群の初頭に位置付けることによって、沈線文系土器群から条痕文系土器群への画期と系統変遷が明らかになってきた。この場合、「木の根A式」を型式として認識するか、段階として認識するかが問題となる。筆者は早期の編年型式である田戸上層式→子母口式→野島式という時間軸としての型式変遷を尊重するため、大枠での野島式の範囲に含めて解釈し、その最古段階の細分型式として、或は概念を一段階下げてタイプとして「木の根A式」を位置付けて置きたい。野島式の拡大解釈とも成り兼ねないが、将来両者の区分が明瞭になった段階で、

型式として設定するのが妥当と思われる。現在では、段階的な意味合いで認識して置きたい。

9. 収束

冗長なるがままに、「木の根A式」とその周辺の土器群について検討を行ってきたが、検討内容には幾つかの骨子が含まれている。それ等を要約し、まとめとしたい。

先ず、「子母口式論争」の基となった多摩ニュータウンNo269遺跡、清水柳遺跡及び新設された「木の根A式」のタイプサイトである木の根遺跡、田戸遺跡、子母口貝塚の出土土器を検討し、各遺跡における隆起線文系の土器群の様相を検討した。その結果、木の根遺跡では文様構成が第1類から第5類に分類され、単一の様相ではなく幾つかの系統要素が集約されていることが理解された。また、田戸遺跡と子母口貝塚の検討から、時間的な段階として城ノ台北段階を設定して、出戸上層新段階、城ノ台北段階、子母口段階、「木の根A式」段階への土器群の変遷を検討した。田戸上層式新段階における代表的な施文帶構造A～Eタイプの5タイプを抽出し、それぞれの系統変遷を構造的に検討することによって、細隆起線文土器の出自と系譜を明らかにした。A～Eタイプの系列は相互補完的に影響関係を持ち、木の根遺跡の第1類～第5類へと系統変遷し、要素として継承されていることが理解された。そして、「木の根A式」は構造的な変革が既に行われており、新生の土器群として認識される内容を保持していることから、子母口式からの分離が予想された。沈線文系土器群から条痕文系土器群にかけて、各地の隆起線文系の土器群を検討した結果、「木の根A式」段階に汎東日本的な齊一性が看取された。壳場遺跡第VI群D2類、竹之内遺跡微隆起線文系a類、木の根遺跡第III群a種、清水柳E-3・4類を型式学的なホライズンとすることによって、条痕文系土器群への画期を捉えることが可能となった。

「木の根A式」とされる土器は、子母口式か野島式かといった型式帰属が問題とされてきたが、その背景には沈線文系土器群か条痕文系土器群かといった大きく重要な問題点が隠されている。子母口式は端境期の土器群として設定された経緯があり、その系統要素、東北地方の沈線文系終末期の併行型式との関係、押型文系終末期の土器群との関係に未解決な問題点を残すが、今のところ沈線文系最終末期の土器群として認識して置きたい。「木の根A式」を子母口式から分離し条痕文系土器群の初頭に位置付け直すことで、子母口式の実態がより浮き彫りにされてくるものと思われる。

今回の分析は細隆起線文土器のみを対象にして、時間軸を設定しながら、土器群の構造的変遷を把握することに重点を置いた。時間軸として設定した城ノ台北、子母口段階の土器様相については触れ得なかった。機会を改めて、各々が型式として止揚されるかといった点をも含めて、詳細な内容検討を行いたいと思っている。

謝辞

本稿を草するにあたり、下記の方々には貴重な文献の貸与等も含め、有益な御教示、御助言を頂いた。また、資料の実見に際しても種々の御配慮を頂いた。記して、深甚なる敬意を表したい。

青木秀雄 池上悟 石岡憲雄 大塚達朗 佐藤典邦 齋藤弘道 鈴木敏昭 高橋誠 谷井彪 塚本師也 土肥孝 中島宏 橋本勉 墓静夫 細田勝 増子章二 宮崎朝雄 宮重行 村田建二 村田文夫 野内秀明 矢島俊雄

[挿図使用土器の出典]

- 第1図、多摩ニュータウンNo269遺跡（安孫子1967） 第2図～第3図、清水柳遺跡（瀬川1976）
 第4図、木の根遺跡（宮1981） 第5図～第6図、田戸遺跡山内資料（金子1992）
 第7図、子母口貝塚山内資料（金子1992） 第8図、子母口A貝塚（渡辺1969）
 第9図、（頃塚1987より一部転載、改変） 第10図、（阿部1989より転載）
 第11図、1・3・9・14—出戸遺跡（金子1992）、2・10—田戸遺跡（横須賀市立博物館1988）、4・11・
 16—城ノ台北貝塚（吉田1955）、5—田中谷戸遺跡（安孫子1976）、6・17・21—城ノ台北貝塚（平
 野1988）、7—中山新田遺跡（原田1986）、8—木の根遺跡（宮1981）、12・20—子母口貝塚（金子
 1992）、13—勢至久保遺跡（飯塚1982）、15—子母口貝塚（増子1989）、18—流出原小学校内遺跡（矢
 島1984）、19—篠ヶ庭遺跡（芹沢1937）、22—タルカ作遺跡（田村1985）、23—桜山貝塚（昼間1971）
 第12図、1・2—岩手。大久保（江藤1988）、3—青森、壳場（三宅1985）、4—岩手。上巣（高橋1983）、
 5・6・11—福島。竹之内（馬1982）、7・10—福島。大烟F（廣岡1991）
 第13図、1～6・18・26・31・32—青森、壳場（三宅1985）、7～9—福島。天光（磯上1989）、10—福
 島。八重米坂A（吉田1990）、11—福島。龍門寺（高橋1985）、12～14—山形。月ノ木B（黒坂1989）、
 15—福島。唐松A（西間木1983）、16・17—福島。前原A（井1991）、19・25—宮城。蛇王洞（林
 1965）、20—福島。難塚C（高木1981）、21—福島。下長谷地（松野1982）、22—岩手。土弓I（遠
 藤1983）、23—宮城。富沢（佐藤1988）、24—山形。いるかい（阿部1983）、27—岩手。赤烟（玉川
 1989）、28・29—福島。大烟F（廣岡1991）、30・34—福島。二本松（石本1982）、33—福島。白米
 中坪A（佐藤1987）、
 第14図、1—千葉。中山新田I（原田1986）、2—千葉。勢至久保（飯塚1982）、3—埼玉。ト伝（鈴木1980）、
 4—埼玉。呉原（吉田1985）、5—千葉。小田部新地（山口1984）、6—神奈川。野島（岩本1983）、
 7—千葉。北谷津（川根1989）、8—千葉。泉北側第2（高橋1991）、9—静岡。山ノ神（小野1975）、
 10—神奈川。師岡打越（中山1990）、11—東京。田中谷戸（安孫子1976）、
 第15図、1～5—茨城。霞入（高1966）、6～9—茨城。常陸伏見（小野1979）、10～14—茨城。安塚（1980）、
 15～21—茨城。奥山C（小河1986）、22～24・31—千葉。復山谷（田村1982）、25・26—千葉。吉
 田馬々台（古内1980）、27—千葉。中山新田I（原田1986）、28・29—千葉。阿玉台北（谷戸1975）、
 30・32—千葉。花和田（鈴木1985）、33—茨城。小田林（桜井1989）、34・35—茨城。奥山下根（高
 村1985）、36—茨城。塙（高村1987）、37・44—茨城。大境（川井1986）、38—千葉。エゴタ（武部
 1982）、39—千葉。北谷津（川根1989）、40～43・48—群馬。中前原（能登1982）、45—千葉。西萩
 原（山本1987）、46・47—千葉。八重塚第II（小栗1985）、49—茨城。南三島6・7区（齊藤1985）
 第16図、1～3・15—高輪寺（青木1979）、4—宮ケ谷塔（山形1985）、5—宮ケ谷塔第5（山形1982）、6
 —明花向C（金子1984）、7～14・37—猿貝北（金子1986）、16・19—桜山（昼間1971）、17・30—井
 沼方第9次（小倉1986）、18・21・25・27～29・31・36・38・39—貝塚山（金子1985）、20—宮前
 （小倉1985）、22・23—井沼方第8次（小倉1986）、24—今宿（小渕1987）、26—和田（青木1982）、
 32—さらら（鈴木1983）、33—打越（荒井1987）、34—白子宿上（永長1971）、35—宮前（飯田1986）、
 第17図、1—神奈川。鳩尾（鈴木1975）、2・3・14・18—東京。堂ヶ谷戸（品川1988）、4・5—東京。
 半藏窯（阿部1989）、6—神奈川。子母口（金子1992）、7・8・16・28—東京。田中谷戸（安孫
 子1976）、9—静岡。大平A（漆畠1980）、10—東京。法政大学多摩校地（伊藤1988）、11・34—静
 岡。木戸戸（石川1985）、12・13—神奈川。夏島（芹沢1958）、15—神奈川。新作小高台（増子1982）、
 19—神奈川。鶴ガ島台（岡本1961）、20—東京。多摩ニュータウンNO406（中西1986）、21—神
 奈川。金が谷台（岡崎1982）、22・23—神奈川。吉井城山（岡本1962）、24・25—静岡。桜台（小
 野1976）、26—東京。葛原（河野1987）、27—東京。武藏岡（倉田1979）、29—東京。吉祥山（山田
 1984）、31—神奈川。皆生水沢（竹石1982）、32—東京。留原（森田1987）、33—神奈川。鶴ヶ峰本
 町（岡崎1983）、

〔引用・参考文献〕

- | | |
|------------|---|
| 赤星直忠 | 1935 「横須賀市戸田先史時代遺跡調査」 史前学雑誌第7卷第6号 |
| 赤星直忠 | 1948 「神奈川県野鳥貝塚」 考古学案刊 |
| 青木 司 | 1986 「稲田寺南遺跡」 稲田寺南遺跡調査会 |
| 青木秀雄 | 1979 「高輪寺遺跡」 久喜市文埋蔵文化財調査報告書 |
| 青木義脩 | 1982 「和田遺跡」 浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第2集 |
| 安孫子昭二 | 1967 「No.269 遺跡」 多摩ニュータウン遺跡調査報告IV |
| 安孫子昭二 | 1976 「田中谷戸遺跡」 町田市田中谷戸遺跡調査会 |
| 安孫子昭二 | 1982 「子口式土器の再検討—清水御遺跡第二群土器の検討を中心として—」 東京考古1 |
| 阿部明彦 | 1983 「いるかい遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第69集 |
| 阿部芳郎 | 1989 「半蔵窪遺跡調査報告書」 |
| 荒井幹夫 | 1978 「打越遺跡」 富士見市文化財報告第14集 |
| 磯上義明 | 1989 「大光遺跡」 福島県文化財調査報告書第219集 |
| 飯田充晴 | 1986 「柳瀬川流域遺跡群(IV)」 所沢市文化財調査報告書第18集 |
| 飯塚博和 | 1982 「半貝・倉之橋・勢至久保」 野田市遺跡調査会報告第1冊 |
| 坂塚博和 | 1987 「丸山遺跡」 野田市遺跡調査会報告第7冊 |
| 石川治夫 | 1985 「木戸上遺跡発掘調査報告」 沼津市文化財調査報告第35集 |
| 石本 弘 | 1982 「二本松遺跡」 福島県文化財調査報告書第104集 |
| 伊藤玄三 | 1988 「法政大学多摩校地遺跡群Ⅰ-C・R区」 法政大学 |
| 井 善治 | 1991 「前原A遺跡・前原B遺跡」 福島県文化財調査報告書第249集 |
| 岩本京子 | 1993 「神奈川県野島貝塚の土器について」 宮報No.8 明治大学考古学博物館 |
| 上野修生 | 1990 「石山神遺跡」 茨城県教育財團文化財調査報告第62集 |
| 漆畠 稔 | 1980 「長者ケ原大平遺跡群発掘調査概報」 静岡県大仁町教育委員会 |
| 江藤千千万樹・長田実 | 1939 「北伊豆における古式繩文式遺跡調査報告」 考古学第10卷第5号 |
| 遠藤勝博 | 1983 「土弓下遺跡」 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第50集 |
| 岡本 勇 | 1961 「三浦市鶴が島台遺跡」 横須賀市立博物館研究報告(人文科学)第5号 |
| 岡本 勇 | 1962 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」 横須賀市立博物館研究報告(人文科学)第6号 |
| 岡崎文喜 | 1982 「横浜市金谷台遺跡」 |
| 岡崎文喜 | 1983 「横浜市鶴ヶ峰本町遺跡」 |
| 小川和博 | 1891 「子母口式土器についての覚書(Ⅰ)」 |
| 小河邦男 | 1986 「奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」 茨城県教育財團文化財調査報告第31集 |
| 小倉 均 | 1985 「大間木内谷・和田北・和田南・西谷・宮前遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第45集 |
| 小倉 均 | 1986 「井沼方遺跡(第8次)発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第59集 |
| 小倉 均 | 1986 「馬場小室山遺跡(第12次)・井沼方遺跡(第9次)発掘調査報告書」 浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第6集 |
| 小柴信一郎 | 1985 「美輪山八木坂第II遺跡」 流山市遺跡調査会報告VOL.6 |
| 小野寛一 | 1975 「ゆずり葉」 加藤学園考古学研究室 |
| 小野真一 | 1976 「桜台一田方郡修善寺町桜台遺跡発掘調査報告」 修善寺町教育委員会 |
| 小野真一 | 1979 「常陸伏見」 |
| 金子直行 | 1982 「野島式土器について—金平遺跡出土土器を中心として—」 土曜考古第6号 |
| 金子直行 | 1984 「明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集 |
| 金子直行 | 1985 「貝塚山遺跡発掘調査報告書—第2地点—」 富士見市遺跡調査会報告書第24集 |
| 金子直行 | 1986 「猿貝北・新町口」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第61集 |
| 金子直行 | 1991 「茅山上幡式土器の再検討」 埼玉考古学論集 |
| 金子直行 | 1992 「田中遺跡発掘」 山内達男著古資料4 奈良国立文化財研究所新中経第34冊 |

- 金子寅行 1992 「子母口貝塚資料・大口板貝塚資料」 山内清男考古資料 5 奈良国立文化財研究所史料
第35冊
- 金子寅行 1992 「子母口式土器研究序説 子母口貝塚の実態と研究史を中心にして」 繩文時代第3号
- 工藤利幸 1988 「大久保・西久保遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
第121集
- 倉田芳郎 1979 「東京都町田市武藏岡遺跡—1978年度調査一」
- 熊谷常正 1974 「東北地方縄文早期後半の様相・条痕文系上器群の系譜一」 遺光器 8号
- 黒板雅人 1989 「月ノ木B遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第135集
- 河野重義 1987 「葛原遺跡B地点調査報告」 練馬区遺跡調査会
- 小林達雄 1989 「縄文土器大観」 1 草創期・早期・前期
- 小淵良樹 1987 「今宿遺跡」 柴山市埋蔵文化財調査報告書5
- 川井正一 1986 「大境遺跡」 茨城県教育財團文化財調査報告第34集
- 川根正教 1989 「北谷津第II遺跡」 加地区遺跡群 I 流山市教育委員会
- 齐藤弘道 1985 「南三島遺跡 6・7区」 茨城県教育財團文化財調査報告第30集
- 桜井一美 1989 「小丘林遺跡」 茨城県教育財團文化財調査報告第51集
- 笠沢 滋 1975 「男女倉」 和田村教育委員会
- 佐藤甲二 1988 「富沢遺跡」 仙台市文化財調査報告書第114集
- 佐藤典邦 1987 「白米中坪A・B遺跡」 いわき市埋蔵文化財調査報告第15冊
- 品川裕昭 1988 「堂ヶ谷戸遺跡Ⅰ」 世田谷区教育委員会
- 鈴木克彦 1972 「荒場遺跡調査報告書」 町田市史編纂委員会
- 鈴木克彦 1978 「子母口式土器の検討の必要性」 多摩考古第13号
- 鈴木敏昭 1983 「さきら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集
- 鈴木秀雄 1980 「ト伝」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第25集
- 鈴木英喜 1985 「新井花和田遺跡」 市原市文化財センター一年報昭和59年度
- 鈴木保彦 1975 「鶴尾遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告書7
- 瀬川裕市郎 1975 「元野遺跡発掘調査報告書」 沼津市教育委員会
- 瀬川裕市郎 1976 「清水御遺跡の土器と石器」 沼津市歴史民俗資料館紀要1
- 瀬川裕市郎 1982 「子母口式土器再考」 沼津市歴史民俗資料館紀要6
- 瀬川裕市郎 1982 「条痕文土器」 縄文土器I 縄文化の研究
- 瀬川裕市郎 1983 「野鳥式土器に関する2~3の観え」 沼津市歴史民俗資料館紀要7
- 芹沢長介 1958 「神奈川県夏島における早期初頭の貝塚」 明治大学文学部研究報告第2冊
- 芹沢長介・加藤明秀 1937 「伊豆・駿河の古式縄文土器とその伴出石器」 考古学論叢第5集
- 高木和夫 1981 「糠塚C遺跡」 福島県文化財調査報告書第98集
- 高島好一 1985 「龍門寺遺跡」 いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊
- 高杉博章 1982 「横浜市上倉田遺跡」 明治学院大学
- 高橋博文 1991 「泉北側第2遺跡」 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X 千葉県文化財センター
調査報告第190集
- 高橋 誠 1986 「荆山遺跡」 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第5集
- 高橋 誠 1987 「椎ノ木遺跡」 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第15集
- 高橋雄三 1981 「子母口式土器研究史における問題点」 稲島考古第22号
- 高橋与右エ門 1983 「上里遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第35集
- 高村 勇 1985 「奥山B遺跡・奥山下根遺跡」 茨城県教育財團文化財調査報告第29集
- 高村 勇 1987 「猿貝塚」 茨城県教育財團文化財調査報告第42集
- 竹石建二 1982 「川崎市高津区菅生水沢遺跡発掘調査報告書」 川崎市
- 武田耕平 1989 「愛宕原遺跡」 福島市埋蔵文化財報告書第31集
- 武部善充 1982 「エゴダ遺跡」 千葉市遺跡調査会

- 谷口康浩 1984 「小山田遺跡群IV」 小山田遺跡調査会
- 谷口康浩 1989 「条痕文系土器様式」 縄文土器大観 1
- 玉川英喜 1989 「赤旗遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第142集
- 田村 隆 1982 「復山谷遺跡」 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VII
- 田村 隆 1985 「佐倉市タルカ作遺跡」 千葉県文化財センター
- 中西 充 1986 「多摩ニュータウンNo.406遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第7集
- 中山 良 1990 「横浜市港北区師岡打越遺跡発掘調査報告書」
- 永長海晃 1971 「和光市のむかし、白子宿上遺跡」 郷土資料第6集
- 西川博孝 1984 「新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書 No.7 遺跡」 千葉県文化財センター
- 西間木薰 1983 「唐松A遺跡」 福島県文化財調査報告書第115集
- 能登 健 1982 「前中原遺跡」 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第1集
- 芳賀英一 1977 「常世遺跡出土の早期縄文土器をめぐる「2・3の問題」」 福島考古学第18号
- 橋本 勉 1980 「安塚遺跡」 茨城県教育財團文化財調査報告V
- 堀 静夫 1966 「猿入遺跡」 作新学院考古学資料室調査報告3
- 林 讓作 1965 「岩手県蛇王洞洞穴」 石器時代7
- 原田昌幸 1986 「元割・聖人塚・中山新田I」 常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV 千葉県文化財センター
- 平野 功 1988 「城ノ台北貝塚」 小見川町文化財報告第13集
- 星間孝次 1971 「諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡」 玉県遺跡調査会報告第8集
- 廣岡 敏 1991 「大畠遺跡群の概要」 いわき市教育文化事業団
- 毒島正明 1983 「子母口式土器研究の検討」 土曜考古第7号
- 古内 茂 1980 「吉田馬々台遺跡」 印旛村教育員会
- 増子章二 1982 「新作小高台遺跡発掘調査報告書」 川崎市教育委員会
- 増子章二・浜田晋介 1989 「川崎市高津区子母口貝塚調査報告」 川崎市市民ミュージアム紀要第1集
- 松野恒夫 1982 「下長谷地遺跡」 岩手県埋蔵センター文化財調査報告書第28集
- 馬目順一 1982 「竹之内遺跡」 いわき市文化財調査報告第8冊
- 宮 重行 1981 「木の根」 千葉県文化財センター
- 三宅徹也 1985 「光場遺跡発掘調査報告書」 青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
- 森田安彦 1987 「留原」 東京都五日市町都道32号線留原遺跡発掘調査報告書
- 谷沢良光 1977 「縄文時代早期末葉の遺構と土器編年(1)――東海を中心として――」 史館第8号
- 矢島俊雄 1984 「出流原小学校内遺跡発掘調査報告書」 佐野市教育員会
- 安岡路洋 1963 「岩槻市鹿室中宿発見の縄文早期末葉の土器」 埼玉考古第1号
- 矢戸三男 1975 「阿玉台北遺跡」 千葉県土地開発公社
- 山形洋一 1982 「宮ヶ谷塔第5貝塚」 大宮市遺跡調査会報告第5集
- 山形洋一 1985 「宮ヶ谷塔貝塚」 大宮市遺跡調査会報告第13集
- 山口直樹 1984 「小田部新地遺跡」 市原市文化財センター調査報告書第4集
- 山田義高 1984 「吉祥山」 武藏村山市文化財資料集4
- 山本哲也 1987 「西萩原遺跡」 君津郡市文化財センター発掘調査報告第30集
- 山内清男 1941 「子母口式」 日本先史土器図譜第12集
- 横須賀市立博物館 1988 「考古資料図録III」 横須賀市人文博物館
- 吉田 格 1955 「千葉県城ノ台貝塚」 石器時代第1号
- 吉田健司 1985 「吼原遺跡(先土器・縄文時代編)」 川口市文化財調査報告書第23集
- 吉田秀享 1990 「八重米板A遺跡」 福島県文化財調査報告書第236集
- 領塚正浩 1987 「田戸下層式土器細分への覚書」 土曜考古第12号
- 渡辺 誠 1969 「川崎市子母口A貝塚発掘調査報告」 川崎市文化財調査収録4

研究紀要 第10号

1993

平成5年12月20日 印刷

平成5年12月25日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社